
魔法使いと風精靈

田中 2 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと風精霊

【Zコード】

Z5884Z

【作者名】

田中23号

【あらすじ】

趣味は剣と弓と鍊金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔法学院卒業。現在無職。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。

魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかつたりします。

第一章プロローグ

木々に囲まれた静かな街道を男が一人、のんびりと歩いている。

しかし、その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきなー！」

木々の陰から出てきた賊が三人道を塞ぐ。

その賊はこれでもかといつほど、山賊のオーソドックスな格好をしている。

伸び放題の髭面に、ところどころなんの染みかも分からぬものが付着した汚い服を着て、曲刀をもつている。

しかし、道を行く男は止まらずに進む。

「ど、止まらないと切るぞー！」

賊は動搖しつつも曲刀を抜き、歩く男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「「うおおおおー」「」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉

をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかのように、また歩き出した。

・・・・・

「俺、かつこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど賊を倒した男、名をクリスと言つ。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いてる。

「かつこよそで言えば、29点ですね。ぎつぎつ赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

森の中に突如、女性の声が響く。

「な、なんだと・・・。俺のかつこよそも精霊にはつたわらんか・・・、嘆かわしいなあ。あとテストの点は言わないで・・・」

クリスはすっと現れた女性に田を向け、わざとらしく頭を抱える。

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかつたじやないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で・・・。あとテストが近づくと意味もなく掃除しだしたり、趣味の鍊金したりしてから赤点なんですよ」

しかし女性は意に介さず、クリスの過去を暴いていく。

「ああああああーやめて、俺の心の柔らかいところを言葉のナイフで抉らないで！…あとテスト前にいつも一番田の趣味に走ってしまいのは病気なんだよ！なぜか一番田は気が引けてやれないんだ」

地面に手をつき、うなだれるクリス。

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まあ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言つてもいいかもしけませんね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですねー」

「主は魔力節約の鬼ですが、魔力 자체は一般人に毛が生えたくらいですからね。まあ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所について、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないといけない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくとも契約できるが、その分精霊の格はおちる。

しかし、クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、提供する魔力は少ないのにフウリの格を落とさないという、

半ば詐欺のような方法でフウリと契約している。

「いや、本当にできると思わなかつた。内容を理解して契約してくれる精靈となると高位精靈だから、下手したら不興かつて死んでたな！」

「私は大らかな精靈ですからね。有難く思つてくれていいですよ。そして余剩魔力を私に渡してくださいですよ？」

そう言つて、浮いたまま、歩くクリスの前に回るフウリ。

「ば、馬鹿言うな。余剩なんてあるわけないだろおおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！…ほとんど限界値の魔力を提供してるんですけどよ！？俺に干乾びりつて言つのか！」

「うふふ、そんな」と言つて、私知ってるんですよ」

「何をしつてるんだ、性悪精靈！」

思わずぶりなフウリに、戦々恐々とするクリス。道の上で見つめ合いが続く。

「まあ、性悪だなんて。ただ、前に拾つた魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に鍊金を繰り返して、吸つた魔力を蓄積できるよつにしたでしょ？？今主がつける指輪、おいしそうですね？」

怪しく笑つて、フウリはクリスの指輪に注目する。

精靈が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂つている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、鍊金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは・・・」

指輪を手で押さえて、胸の前にもつていき祈るよつてお願いするクリス。

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがと「アリヤ」やす、ありがと「アリヤ」やすー。」の恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので

クリスは「アリヤをするよつて両手をもみ合わせる。

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込む魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

クリスは、体に取り込む上限を精霊のよつて増やしていくいかと思つたのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃつたからなあ

クリスは空を見上げぼやく。

「向こうでは、引く手数多でしたし、宫廷魔法院にも内々に推薦をもらっていましたのにね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニー・トラップまであるし、女性不信ですよ俺は」

フウリもそのことは知っていたので、むしろ魔法院に主が行かなくてよかつたと思っている。

「なら、そのままギルドで遺跡に潜つてもよかつたじゃないです。あと主は女性不信になつても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴つたら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスクですかね、あの仕事も。まあ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴つたらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやっぱってのは知つてたつもりだけだ、平民にできる想像のせらじこ上のやっぱしだったんだよー」

不毛な言ごっこを続ける主従。

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宫廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞ…！」

フウリの言葉に本当に涙目になり、クリスは顔を拭う。

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それじゃ、師匠に迷惑かかるつしょ。宫廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入つたら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに利く。

「今思つと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよつてこなかつたんじや」

「それはそうでしょう。拳句に私のような高位精霊連れてますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が・・・。もつ少しもとなしくしていればよかつたのかあああーー！」

真実に気がつき、愕然とし叫ぶクリス。

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まあ、けど、男友達なら結構いたじやないですか」

フォローしているのかどうか分からぬ言葉を主にかけるフウリ。

「あいつらほんとんど彼女やら許婚やらいたからなあ。友情より女を選びやがって・・・」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそうこうした生徒への配慮も考えるようになつたとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ・・・。あれは予想以上に人も集まつて引けなくなつたのもあるけどな」

手を頭の後ろに組みながら歩くクリスがそう言へ。

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかつたじやないですか」

「簡単に作れるならやつしてみよ……。」

クリスは腕を振り上げ、フウリの言葉に全力で抗議する。

「主に氣のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精靈とも契約してた・・・ような？」

「あいつの精靈はお前に怯えて、俺の前じゃほとゞぎ出でこなかつたからな」

フウリは上位精靈の中でも最上位に位置されるほど高位な風精靈のため、中位、下位精靈は一緒に空間にいるだけでもその影響をもろに受け、風と相反する土属性の精靈は消してしまつ」ともある。

「あと、あいつは男だ！！」

「え？」

「え？」

何か認識の齟齬を感じじる一人。

「まあ、主がそういうならいいです」

「なんだその引っかかるいい方！」

「気にしないで下さい、とにかく主の生まれ故郷はまだですか？」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしててるんだぞ」

「なら飛んで行きましょうよ、主ー。」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切らひ
風精靈が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどからない上に、節
約魔法で皆無といっていいほどの消費なので、節約の鬼であるクリ
スもフウリの提案に乗る。

クリスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第一話「魔法使いの過去と由に風」

「よつと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかつたじゃないですか

「おほかーそんなこと田舎の村でやつたら、俺が村で浮いてしまつだらう！」

「何をこまさり。主は浮くの得意じやないですか

「学院でも好きで浮いてたんじやないだよー？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか

「決らないでください・・・」

「そういうえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた田で見ないでください。想像つくるでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが・・・

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意フウリ様に近づけさせていただきますとも！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がつてくると段々人型をとれるようになる。

フウリ並になると、服なども魔力で形成できる。

「まあ、主の過去は特技から推察できます。『』が得意なのは、森で狩猟をしていたからでしょう?」

「狩猟をしていましたからでしょ?」

「うん、畠耕すよつ向いてたみたいだから、狩のときはこいつもついていた」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょ? 王都でもすれ違つと皿を輝かせて見てましたからね」

「あはー、ちやんぱりじで磨きました」

「ちやんぱりじであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・?」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだとか言つていつも木の棒でも振り回して大きくなつて、本当に王都まで行つちやつたんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たつてる・・・剣闘の余裕なんてなかつたんだよー木の棒で悪いか!」

「悪くは無いんですけど、本当に木の棒で王都に行つたんですか・・・。」「数日通つた道、結構魔物いましたよね?」

「え、うん。木の棒で頑張つた。で、王都目前で力尽きたといひを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで……！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさつきから何か良からぬ気配があるので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であつた亡靈騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ……。フウリと俺の剣技とこの剣があつて五分五分だつたやないかい！……え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡靈に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦つて、やっと倒したという事があった。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行つたとき、小汚い樽に十把一絡げで売つていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入した。

そして遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、古代の魔法文字が特殊な方法で刻まれており、解読できない部分も多かつたが、できた部分をあわせると、

世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚したのだ。
ボロボロだったその剣をクリスが得意の鍊金で見栄えと、剣そのものの切れ味をよくしたものである。

所持者の魔力を吸つてなんらかの効果を得る魔剣といつのは存在するが、世界の魔力を吸つて効果を得る魔剣といつのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるお金を得て初めていったのが武器屋だ。木の棒を振り回すのは恥ずかしいといつ」と、王都に来て少ししてやっと自覚したそうだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がつてゐるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思つのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送つてくれたのに。ちよつと俺には無理だわ」

「まあ、様子見だけでもしてきます。処理できそなうなら処理します

し

「うーい。お願ひします」

「はい、お願ひされました。それでは、危なくなるかもしけないので、少し頂きますね？」

「頂くつて何・・・を!?

クリスの脣にフウリのそれが重なる。

「ん……。」ひかりました

「おこまてそ」の色情精霊

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持つての行動ではないですよ?ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ!だけど別にその方法じゃなくともいいだろー?」

「は?その方法とは?」

「い、いや、だから、あ、き、キスじゃなくてもだな!」

「つふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリィイイイ!指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろ?が!!」

「それでは見せますので、おとなしくしてるんですよ。あんまり騒いでると、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな!!お前のせいだ!!早く行って来い!!怪我すんなよ!!」

「はい、それではまた後ほど」

そう言ひ畢ひ、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふう、白・・・か・・・」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さつきから一人で大声だしたりしゃがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちよつと村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よつて、フウリと話しているクリスは独り言を言つてゐるよつとに見えるため、学院外でもあまり人がよりつかなかつた。

フウリ並の高位精霊なら、人に姿を見せることも簡単なのだが、フウリはあまり王都で人前でようとする事は無かつた。

「怪しいだと…こんなシティボーイの俺を捕まえて怪しいだと…この田舎者が！お前じや話にならん！村長を呼べー！」

クリスはまるでギルドのカウンターにたまにいる、たちの悪い客のような言葉と仕草で子供たちに向かう。

「ふ、ふざけやがつて…」の…

「おれたちにかなつと思つなよ…」

「ぱつ」

「僕たちはトリエ村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばつか、どうせ偽物だつて」

「金持ちやうな顔じゃないだろ」

少年たちは口々に言い、木の棒を振り上げて威嚇する。
子供たちの中では、クリスが怪しい奴から、大悪党にまでランクアップしている。

「木の棒……それにトリエ村騎士団だと……くそ！なんてことだ。俺の負けだ……。好きにしろ……。」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリエ村初代騎士団長はいま膝をついている。

「分かればいいんだ！」

現騎士団長が、膝をつくクリスを上から見てふんぞり返る。

「けどここにいるんだ？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「それがいいな、これでこの前、商人さんを間違えてつかまえちゃ

つたのはむちやらだなー！」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まつてたよな」

団長の後ろで、この大悪党をどひするか、処遇を決定する会議が行われる。

「よしーついて来い！村長の家にいくぞ！」

後ろの会議で決定したことを耳に入れ、団長が号令をかける。
そうして結局、クリスは故郷の村へと、子供たちに引っ立てられて足を踏み入れる。

「よし、お前はここで待つてろよー！今兄ちゃんたち呼んでくるから
そう言い残して子供たちは村長の家に入つていぐ。

クリスは一人になつてしまい、後ろから村長の家に入つてしまおう
か迷つている。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろつて言つただろ！」

すると怒鳴り声がしてきたので、反射的に目を瞑つて衝撃に耐える
よつに首をすぼめるクリス。

よべーの怒鳴り声と共に殴られていたクリスは、「お前」「お」

の時点での防御体制を取る。

しかしいつもは瞬間に来る衝撃がこないので、クリスはゆっくり田を開けて防御体制を解く。

そして自分が怒られているわけではないことに気づき、周りを確認し誰も見て無いことにほっとする。

クリスが奇行に走っている中、子供たちは必死に弁解していた。

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「悪党を村の前で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよー。」

「凄いだろ！」

と、自慢げな子供もいる中、一発の雷が落ちる。

「お前たちは！…また、そんな勝手なことして！…何度言えれば分かるんだ！…本当に危ない奴だつたら、最悪殺されてしまふかもしないんだぞ！…」

子供たちの弁解は怒鳴り声にかき消される。

旅の商人を捕まえたときにも、同じことを言われて、こつぴどく怒られているトリエ村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「それで、そいつは何をしてたんだ？」

子供たちの泣き顔に、少し声色が優しくなった村の男が聞く。

子供たちはそれを聞いて顔を見合わせる。

「えっと、空に向かつて独り言を叫んでたんだ！」

涙目になりながら、団長がみんなを代表して発言する。

「そ、それだけか！？」

「うん……」

子供たちも、今更になつて捕まえた人物が特に何も悪行を働いていないことに気づく。

男は一瞬固まる。

村の客人かもしないのに、無礼を働いたとあつては何かあれば困つた事になる、ざわつく大人たち。商人のときは穩便に済んだが、もし変な噂が立つて商人が来なくなつたりすれば、村にとつては大事なのだ。

「とにかく、その人のところにすぐ案内しろー！」

すぐに立ち直った男は口を開き、子供たちに命令する。

「う、うん。村長の家の前にいるよ」

「わしも行こう」

それまで成り行きを見守っていた村長は、立ち上がり家を出る。

自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

家の前に出た村長は、見覚えのあるような男が立っているのを見つけて、しかし慌てていた村長はすぐに謝罪に入る。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まさに申し訳ない。」の通りじゃー」

「本当にすまない！」

そう口々に言つて皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡つて俺のせいといつか・・・」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかつた身であり、初代トリエ村騎士団長という身でもあるので、クリスのほうも気が気じゃない。

「おおー。そう言つてくれますかー！」

村長がぱっと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「・・・あれ?」

「お?」「

「んー?」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔である」と
に皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねえか!」

「おい、クリ坊か!」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

クリスは即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配わせやがってー!」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがってー!」

「マコアンさんもジョシュもずっと心配してたんだぞー!」

「マコアンとマクリスの母の名前で、ジョシュは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長ー・ブブツ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の五年ほど前は、村の客人を罠に掛けたりと、もつとひどかった。

団長は年下の団員をひき使って、村の周りに罠を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罠にはまって、一週間臭いがとれなかつたんだぞおおー！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらいい元気いないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まあ、こま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな

「てめえ、貸してた色本返せやー！」

「お前が出ていったからリリイちゃんが元気なかつたんだからなああー！」

「へへ、もげろー！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこには、後ろから声が掛かる。

「クリス！！」

そこには、一度畠から戻ってきたマリアンがいた。

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄つてくれる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！

倒れたクリスに馬乗りになつて殴るマリアン。

「！」のつゝー馬鹿息子がつづー！」

「おー」、「ちよ」、「あば」、「母」、「あが」

「おーおー、そんなこすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チッ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言ひ言葉かーーー！」

「つるやこ、馬鹿息子ーー五年も連絡なしでーーどうだけ心配したと思つてんのーー」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すんませんでしたー！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もひいわ。殴ってすつきりしたし。ジョシュはまだ畠だから、とつあえず家で待ちましょ」

「はーい」

「畠もお騒がせして！」めんなさいね。この馬鹿息子だけ、今度田を改めてけやこと村長のところに挨拶をせなきゃなので

「よこよこ。積もる話もあるじや もひつて

「わすが村長だぞ。あと村長の畠より、色本は犠牲になつたのだ」

「お、俺のお気に入りがああああああああああああ

晴れ渡つた故郷の空に次期村長の絶叫が一だまるのだった。

第四話「魔法使いと魔女兼」

「うおおお、帰ったわおお」

「うわこわね、お帰りなれー」

クリスは家に入るなり騒ぎだす。

「我が家はーいね、一番だね！王都なんてほーじつぽーし、それに比べてこの村はなんて清々しいんだ」

クリスはテーブルにつこうへつひき、マリアンはお茶を入れて戻つてくる。

「あんた、王都にいたのかー」

「うさ。騎士になるつもつだつたからねー」

クリスはお茶を飲みつつ答える。

「うわおーしゃー。あんたが何で家を出たかなとてひつけお見通しだ

「うー、嘘じやねーしー。騎士になるつもつだつたしー。」

「うわおーにひづぶ息子に母は呆れ顔だ。」

「あの年は、ウルバが死んでから初めての不作だったかね。本当なうりごとシコをどこかに奉公に出さないといけなかつたのを知つて、

出て行つたんでしょう

ウルバとはクリスの父、マリアンの夫である。

「う・・・。ま、まあ、それが関係してないといつたら嘘になるけど、本当にそれだけじゃなくて、騎士になりたいってのも理由だったし。そもそも、ジョシュのほうが俺より何倍も畠仕事できるからね」

すっかり見破っていたクリスは、少し赤い顔で本音を語る。

「はあ。あんたが納得してるならいいけどね、母としては複雑だわ。今からでもジョシュと土地半分ずつとかしない?」

「そんな慣習作ると村の人たちに睨まれるからやめとくよ。ジョシュは家の農地をちゃんと相続したんでしょう?」

「べつたけど、村長にも話して、ちゃんと相続させたわよ。村長もつすうすあんたが出て行つた理由気づいてたみたいだけど黙つてくれてね。ジョシュは年齢的にはちょっと早かつたけど、体でかいし体力あるから大丈夫だろうって、村のみんなも説得してくれたわ」

「ああ。ジョシュはでかかつたからなあ

マリアンの話に、クリスはどこか懐かしそうに弟の姿を思いだす。

「あれからもつと大きくなつたわ

「えー? 何食つたらそんなにでかくなるんだよ!」

しかし、マコアンの言葉で思いだした弟の姿が霧散する。

「あんたと同じ物食べさせてたんだけどねえ」

「みじみとマリアンがお茶を飲みながら語る。

「身長の格差社会やー」

「主もそこまで小さくはないでしょう」

「弟より小さいだけで俺のプライドはズタボロなんだよ・・・」

クリスはビックリが哀愁の漂つ背中で語る。

「主のプライド・・・？ああ、あれですか、遺跡でよく捨ててます
よね

「プライドなんて遺跡じゃ邪魔なだけだよな

無駄にプライドが高いだけで食つていけるのは貴族だけ、クリスは
そつ思つてこない。

「さすが主です。早さで血信のある私も、あんな見事な逃げっぷり
は真似できません」

「毎度毎度抉り込むみで言葉の暴力を振るつてくれるな・・・って
あれ？」

「どうしました、主？」

いつも過ぎるやうに取り、「やつと何かに気が付いたように横を見るクリス。

フウリが首をかしげてクリスと見つめ合ひ。

「何、そもそも当然のようにな話に混じっているの？」

「やつと気が付きましたか、鈍いですね主。それだから、女性との出会いも見逃すんですね」

「最近、フウリの罵倒に慣れてきた自分が怖い」

「変態主ですね、無職と並べるともう手の施し様がないですね、ご愁傷さまです」

「えーっと、馬鹿息子。そここの綺麗なお嬢さんはだれだい?...」

突然現れた美女に驚いて、固まっていたマリアンが再起動してクリスを問いただす。

「これはこれは。挨拶が遅れまして、大変失礼いたしました。私、主と契約させていただいております、フウリと申します。未熟な身ではありますが、誠心誠意クリス様に頼んでいきますので、どうかよろしくお願い致します」

綺麗なお辞儀とともにフウリは自己紹介をする。

「ちよ、馬鹿!フウリ!大事なところが抜けてるよー?」

「何が大事なところよー馬鹿息子！都会に行って帰ってきたと思つたら、こんな別嬪さんと契約して主なんて呼ばせるなんてどうこう了見だい！もう少しお仕置きが必要なよつねー表に出なー！」

「勘弁してくれえええええ」

その自己紹介に足りないものを感じたクリスが叫ぶが、マリアンが腕まくりをして睨みつける。

「ふむ、大事なところですか、主・・・ああーそうですね、誤解を招いてしまいました。失礼しました。主とは契約しますが、ほとんど対価も頂いておりませんよ」

「違うよおおおー？ そりだが、違うよおおおー！？」

思いだしたよつて手を打つフウリを見て、クリスは期待の眼差しを向けるも、見当がはずれて叫ぶ。

「あ、あんたつて子は・・・そんなことあるわけじゃないと思つてたんだけどねええ！？ 都会に行って根性が腐つちましたのかね！」

「おこいこいー信じてくれよ母さん！ってか、フウリも悪ふざけが過ぎるつてー！」

マリアンの雰囲気に押され、クリスは必死に状況を開きよつとする。

「ふむ、すみません、主。お母様も途中から戻りこいつでしたので、少し悪乗りしてしまいました」

「母さんもぐるかああああああー...」

結局一人にからかわれてただけだと分つて叫ぶクリス。

「五年も心配かけた罰さ。それにしても、あんた中々面白い娘さんを連れてかえってきたじゃないのや」

「主をからかうのは私の趣味ですので」

「...に味方はいないのかあああああー...」

悪びれもしない一人を見てやつぱり叫ぶクリス。

「そんなことより、この娘さんとはどんな関係なんだい？」

「そんなことって軽く流さないで・・・」

「私は主と契約した精霊兼嫁です。お義母さま、これからよろしくお願ひ致します」

「あらーまあまあー...こんな馬鹿息子ですが、可愛いところもあるので、見捨てないでやってくださいね」

フウリが事実を少し捻じ曲げながら云々、マリアンがそれを受け入れ嬉しそうに言ひ。

「おいしい！精霊が嫁とか聞いた事ねえよー...そんな契約してないからねー!..」

「このゾンビにたまらずクリスは叫ぶが、同時に「」の一人には何言って無駄だと思い始めていた。

騒いでいると、玄関が開く音と共にどたどたと慌てたような足音が響く。

「母さんー！兄さんが帰ってきたる本当ーー？」

「本庄よ、ほりこー！」

マリアンがクリスを指差すと、クリスの弟、ジョシュがクリスを口ツクオンする。

そして一息に間合いを詰めると、クリスを力一杯抱擁する。

「兄さんっ！生きててよかつたよおおお！」

「ああ、心配掛けたなって痛い痛い、馬鹿、絞めすぎだああああ

「に、い、ひ、あ、ん、」

「聞いてねええーおいまじで体格差考えいおおおおー・ギブー・ギー・ブ・・・」

段々、動かなくなつていいくクリス。

「うあああ、」めんよ兄さん！嬉しくてつい

「うあああ、」めんよ兄さん！嬉しくてつい

ジニアシヤセツモニヒリサヘ。

「はあはあ。殺す氣かー。」

「いのんよお」

「ああわいわかつたから涙田になんな鬱陶しこ」

「うん・・・」

うなだれるジニアシヤ。

それを見て、クリスはため息をつめつて、一度田の前にいたジニアシの頭を撫でる。

「すまんかったな、家のijoと金歸せちまつて」

「い、兄さん…そんな、僕のまつりやー。」

アーツヒーヒジニアシヤは両腕を広げる。

「ああまた抱き着いひとかるな」

「い、いぬんさこ」

「せこせこ、もっこりから、とつあべす畠仕事の泥落とじこじこ

「うそ、洗つてくわ」

ジョシューは家の裏の井戸へ向かう。

「相変わらずだなあ、あこつせ」

「あんたが出て行った理由も、最近気付いたみたいでね、少し落ち込んでたのよ、あれでも」

でも少しばかりじやないかしら、ヒマランが続ける。

「主が家を出た理由ですか？騎士になるためでは？」

マコアンの皿葉にフウリが食いつく。

「あら、お嫁さんにも何も話していないなんて、いけない子だわね、あんたは」

「おこりよつとまつてください、嫁じやねえですよ」

「また、そんな照れちやつて。こんな息子だけど結構家族思いなのよ、家を出た理由だつて本当は」

「おおおおつと、今までだぜお母様」

「主は黙つていつも通り壁の花になつていてください

「ひどいわーパーティーでもいつの間にか壁際に移動してゐ俺に向かつて！」

「で、あの子が家を出た理由なんだけれどね・・・つて理由なのよ」

「まあ、主は家族思いなんですね、そういうえば学院でも女の子に言い寄つてた貴族に・・・それで・・・あれで・・・」

「キャツ キャツ」「ウフフ

・・・・・

弟が戻るまで、部屋の隅でいじけている魔法使いの姿があったとか・

第五話「魔法使いジョシュア」

話をしていたら、いい時間になつたので、マコアンが夕飯を作り、皆で食卓を囲む。

「で、兄さん、フウリさんとの関係は良く分かつたんだけど、結局五年も何じてたの？」

夕飯を食べながら、ジョシュがクリスに尋ねる。

ちなみに、精霊であるフウリは特に食べ物を食べる必要はないのだが、少しばかり食物の魔力を取り込むことができるから、という言い訳でクリスが同席を求める事が多かつたため、最近では魔力以外にちゃんと味を感じることができるようになつた。

クリスとしては、一人で食べるの寂しいといつのが本音である。

「王都の魔法学院で学生してました。超優等生だったんだぜ」

ジョシュは、昔から兄の言ひ方を無条件で信じるのである。

「さすが、兄さんだね！」

「本当に、さすがですね主」

「あ、やめて。」めん、嘘だから。実は卒業もせつせつでした

「あなたは昔から、ジョシュを騙し切つたことはないわよねえ」

ジヨシユの純真無垢な瞳に弱いクリス、嘘をついても結局嘘だと言うか、その嘘を眞実にしてしまう。

「くそーそこはこいつもなら、フウリが痛烈なツツ「!!」をするといひなのに、俺の弱点を的確に突いてくるなんて・・・いつも通りか」

「平常運転です」

「本当に仲がいいんだね、二人は」

「夫婦ですか？」

「夫婦じゃない！」

「主従と言つたほうがよろしいですか？主」

「え、あ、うん。そう言われると、契約内容があれだし、ちょっと困つちやつわ」

「父親に似て煮え切らない男だね、あんたもーちゃんと責任とりなー！」

「おおおーー？責任つてなんだよおおお」

「主、契りまで交わしたのに、そんな・・・」

「またやこりー！契りつて契約だろが！なんか変なふうに聞こえるからーただの、魔法使いと精霊の契約だろー！」

「あはは、まあまあ。兄さんも熱くならないで。フウリさんも兄さ

んをあんまりいじめないでね?」

フウリがクリスをいじって、マリアンが煽つて、クリスが爆発して、ジヨシュが宥めるローテーションで食事の時間が過ぎていく。

「結局、あんたは冒険者しつつ学生してたのかい?」

「うん、学生が本業で、冒険者はお小遣い稼ぎだね」

「なら、兄さん魔法も使えるんだーす」になあ

「あんた、あんまり危ない」とはするんじゃないよ? 冒険者なんて乱暴者も多いって言つし

「大丈夫です、お義母さま。主は、剣と弓の腕では冒険者ギルドでも一目置かれ、難易度高い討伐も何度かこなしていく、そっち関係ではかなり有名人です。逆に、魔法使いと言つてもだれも信じてくれませんが」

「そういうえばこの子、昔から木の棒で魔物しばき倒してたからねえ

「兄さん強いもんねえ」

「しみじみこいつちみないでくれますか! ? 魔法使いなんだよ! 一応! ギルドの登録も魔法使いなのに、それっぽい依頼一度も受けた事ないけど! ! フウリと契約してからは、本当に全然使って無いから腕が落ちてないか超心配なんだけど! !

実際、鍊金以外の魔法はフウリ任せが多く、クリスはギルドだとドラゴンキラーの称号を持っているため、凄腕剣士として扱われてお

り、魔法は、使えるらしく？くらいにしか思われていない。

ちなみにドラゴンキラーは、ドラゴンを討伐したときに国から褒められる称号だが、国の騎士はほとんどもつている。

騎士団のドラゴン討伐ほど醜い狩は無いと言われているが・・・
何人で倒しても参加すれば貢えるため、騎士の虚榮心を満たすもの
というのが一般的の認識となっている。

しかし冒険者でもつていると、その冒険者の実力を示すものとして、
ぐんと価値があがる。

「そういえば、騎士団からもお誘い受けてたのに、何でそつちに行
かなかつたんですか？」

「うん？だつてお前、魔術学院入れてもらつたのに、卒業して騎士
団入りましたとか滑稽だろ！師匠にも顔向けできないし！あと実際
見た騎士団はちょっとなあ」

「あのお師匠さまで、笑つて許してくれそうですけどね。逆に無
職のほうが心配してると思いますよ。まあ、主が騎士団入るつて言
つてたら私は実家に帰つてしまひたけど」

「師匠には心配掛けてばっかりだなあ、今度遺跡潜つて、また貢物
でも献上するか。あとお前の実家と言えばあの空の島か、さすがに
もう行きたくないぞ・・・」

クリスとフウリが話している横では、マリアンとジヨシュが呆れ顔
だ。

「あなた、本当に危ないことは程々ござりますよ」

「兄さん、ダメだよ、危ないことは。兄さんが怪我したりしたら悲しむ人がいるんだからね」

「あはー、すんません、氣をつけます」

兄が落ち込んだことを感じて、ジヨシュが明るく話す。

「けど、兄さんの冒険の話を聞きたいなー」

それに喜ぶクリス。

「やつらがそつかー！じゃあまづは、国境付近で暴れてたドリゴンを退治した話をしよう。あのときは本当に大変だった、敵国の軍隊まで出張つてきて」

「そして、敵国の軍隊がドリゴンを切り倒す主を見て、逃げ出して行きましたよね。おかげで今、相手の国とは停戦交渉中です」

「いや俺のせいじゃないだろ、停戦交渉は」

「いえ、聞いた話だと、あのときの軍隊に敵国の王子がいたりして、帰つて早々見てきたことを報告したら、王様が泡を食つて停戦を要請したらしくですよ」

「だからか、なんかあの依頼以降、国からおいしい仕事が・・・」

報酬のほとんどは、クリスの師匠への貢物や、鍊金の素材で消えて

い。

「お師匠さまが名前とかは隠してくれたみたいですね、ギルドも主には借りがありますから、しつかり情報統制してくれたみたいですよ」

「なるほどなー。しかし、なんで俺の知らないことをフウリが知ってるのか、とても疑問なんだけど」

「気にしないでください、趣味の範囲です」

「多趣味な精霊だなおい！」

マリアンとジョシュは果然と二人の話を聞いていた。

「兄さん・・・戦場に行つたの？」

ジョシュが心配そうに言つ。

「あんた、ほんと無茶ばっかりだね・・・」

マリアンが、呆れ切つた顔をする。

「俺ですが、家族の視線が痛いです」

「ドーフィンなんて序の口じゃないですか」

「おいやめろ、もう少し刺激の少ない話をしよう」

「じゃあ、騎士団を闇討ちした話ですか？」

「過激すぎるだろ！！」

「そもそも、刺激が少ない話が出てこない件。人間相手な分、騎士団闇討ちが一番刺激が少ないと」

「おいいいい、あるだろなんか！俺も思いつかないけど！ああ！あれだ。王城忍び込んだときのやつ！あれなら特に問題ないだろ！」

「王様に一撃いれたあれですね」

「あ、ごめん、やつぱなし」

「ああああ、あんた！そんなことしたのかい！？」

「兄さんそれはさすがにまずいんじゃ・・・？」

「おいいいい、違うんだ、俺はやつてないいいいいい」

魔法使いの絶叫が響く中、夕食の時間が過ぎていった。

第六話「魔法使いの剣の秘密」

「へへ、なんだ、」の五年！本当にへなこと無一物だ。」

夕飯を食べ終わって、クリスは五年ぶりの自分の部屋でじっくりしてこる。

「私との出来事をお話すればよかつたのです

ふわふわ浮きつつ、フウリが囁く。

「・・・あれならちゃんと冒険してるし、別になんか倒した話じゃないし、とっても食卓向けの話だったんじゃね？なんで早く言わないし。」

「ええ、やうですね、すみません。あの島に来るので遭跡一個無くなつてますけど、一番まともな話ですよね」

「ああ・・・嫌な・・・事故だったね・・・」

「お師匠さまが涙目だつたじゃないですか」

「やめて、あの顔思い出すと今でも罪悪感がひしひしと。」

「ダメな主ですね

ベッドに顔を埋めているクリスを見ながらフウリが続ける。

「ヒカル、あの良からぬ気配についてですが

「おお、そういうれば何か分かつたのかい！」

「ええ。ちょっとやばい」とになります

「え。なにそれこわい。亡靈はもう勘弁」

「私は亡靈のほうがまだいいですけどね」

「お、おい、やめてくれよ。亡靈のほうがましつて、もう俺個人で
どうにか出来るレベルじゃなくね！？」

「落ち着いてください、主。大丈夫です、私にとつては都合の悪い
相手なだけで、主なら一刀両断です」

「一応魔法使いなんだけどね俺。まあ倒せるならなんでもいいや・・・

・

「さすが主。それでそのやばい奴なんですが・・・魔力食いです」

沈黙が部屋を支配する。

「・・・おいいいいいいいいいい、まじもんでやばいやないかあ
あああああー！」

魔力食いとは、その名の通り魔力を食べる、魔物の突然変異である。

魔力食いは、世界から一切の魔力を吸収できず、そのため、生物が
もっている魔力を食べて力をつける、特に精霊が好物で、精霊食い
とまで言われる。実際、精霊食いというのは別にいるのだが、人間

から見た被害はどちらも天災レベルなのであまり区別されない。

どちらも、放置して精靈を食べつくされてしまつと、不毛の大地ができるあがる。

「まだそこまで精靈も食べられていないそなので、明日にでも倒しにいきましょ！」

「え、倒せるのあれ。くそ珍しいし、俺見たことも無いんだけども」

「主の剣なら、切れ味抜群ですよ。切れればあいつの魔力も吸つて切れ味がドン！更にドン！切り刻みましょ！」

「フウリさんテンショソおかしくね？そもそももうちの剣、他の生物の魔力吸えたつけ？」

「いやですね、主。私はいつも通りですよ。ただちょっと同族が食べられてイライラしてるだけです。あと、主の魔剣はそもそも主の魔力を吸うこともできますよ？ただ、主が素寒貧だから世界の魔法を吸つてるだけです。切れば生物の魔力も吸収します。だからドラゴン切つたとき切れ味やばくなつたじゃないですか。本当にあの大きなドラゴンを一刀両断するなんて、そりや停戦したくもなりますよ」

「ああ、怒つてるのね。まあ、俺もむかつくし、切ろうか。ってか、この魔剣すごかつたんだな・・・。てっきりちょっと珍しいだけかとおもつてたわ。」めんよ

「明日、切り刻みましょ。というか、魔剣については、私より長い相棒なんですから、正確に把握してあげてください」

「はい、すんません。けど、刻まれた古代魔法文字は難解すぎて、師匠だつて解明できないところ多いし！剣振ってるときは、切れ味増したなあとと思うことはあつたけど、俺の隠された力がピンチで覚醒したんだなつてくらいにしか思つて無かつたです、すんません」

「てつきり知つてるものかと思つてましたが。主に隠された力は一切ないので安心してください。ピンチになつても、魔剣にあげれるほど魔力もないですね」

「ぐぬぬ。指輪の魔力もまた集めなおしだし、つてか結局魔力使つたの？」

「ああ、主に接吻して頂いた魔力ですね、ちゃんと使いましたよ、半分食われて消滅しかかつてた精霊に」

「接吻つて……まあ使つたならいいや」

「ふふ、赤くなつて可愛い主」

「おい、やめろ、くつこいくるな」

「しかたないじゃないでですかー、あるじのへや、ベッドにしきないですしー」

「棒読みはやめろー別に浮いたまま寝れるだろつがーそもそも睡眠いらないだろー！」

「まあまあ、主。私も長旅で疲れているんです。接触してれば効率的に魔力を攝取できますし、主の節約にもなるでしょ？」

一応、契約して魔力を渡している場合、契約者と非契約者が離れて
いると、到達するまでに微弱な魔力が世界に放出されている、と言
われている。

「ぐつ・・・分かったよ。もう寝よう」

「はーい、主。おやすみなさい」

「おやすみ。フウコ」

・・・・・

「（ちくせうー柔らかいものが当たって寝れないーーー）」

翌朝。

「結局ほとんどの寝れなかつた・・・」

クリスは隈ができた顔でベッドから出て顔を洗いに行く。

「主、寝不足ですか？いけませんよ、素人ではないのですから、戦いの前に夜更かしなんて」

「お前のせいなんだよ！？」

「ふむ。刺激が強すぎましたか？」

「猫」に付するなまくわおもね

クリスとアカリはいい会いしつつ食卓へ

「なんでもないやん」

卷之三

はい、一人ともおはよ。

ケリスは「大きな弟の姿が見えない」といふて母に尋ねる。

一あれシミシニ^ト?

「もニ煙にしちたれ」

「お早した」

「あの子、お兄ちゃんがいつ帰ってきてもいこうと頑張ってたのさ」

「つたく、あいづは・・・」

「ふふふ、いい弟さんですね、主」

「ハハヤニ」

マリアンが微笑ましそうに一人を見る。

「ほり早く食べちゃいな」

「うーす。 いただきます」

「いただきます」

「私もそろそろジョシュの所に行くから。 あなたは村長に話をしきな。 あとリリイにも顔見せに行くんだよ、あの子はあなたの」とすごい心配してくれてたんだから」

リリイとはクリスの幼馴染で、何かと変わっていたクリスの面倒を良く見てくれていた。

「あいあい。 そのあと少し森のほうに行くからー」

「森のほうは、今危ないからやめときな。 なんか見た事もない魔物が出るらしいから。 そのせいで、昨日も村長の家に獵師とか自警団が集まつてたんだよ」

「なるほど。 まだ食われた人とかいない?」

マリアンがクリスを鋭く睨む。

「食われた人はいないけど・・・あれは人を食うのかい? というか、

あんたあれの正体がわかるのかい？」

「あ、あはは。ちょっとやつかいな魔物だけど、何度も倒したことあるから、今日にでも始末してきちゃうよ。村の人気が食われたら嫌だからね」

「危ないことはしないで欲しいんだけどねえ。まあ、あんたがそう言つなら信じるわよ。そのこと、村長には言つてこきなよ」

「つよーかいしました、まつかせとつよー」

「はいはい、それじゃ行つてくるからね。怪我するんじゃないよ」

「こつてらつわーー」

「こつてらつしゃ いませ」

マリアンを見送ったクリスとフウリは、食事を済ませ、支度をする。

「魔剣って、切つた奴の魔力も吸収できるんだよなあ・・・。これ応用できれば、魔力の上限を増やせなくとも、吸収速度をアップできそうだなあ。うーん、取り込む術式に節約魔法を織り交ぜて、小さい作用で大きい魔力を得れるように・・・、まずは魔剣を改造して・・・」

「主、考えるのもいいですが、早くあいつを切りに行きましょー」

「あ、はいはい、大分怒ってるね」

「ええ、同族を食べられて黙つてはいられません。昨日助けた精霊

も手助けしてくれるらしいです。火精靈で、魔力食いに棲家の洞窟を奪われたらしいです。私、火精靈とは相性いいので、丸焼きにして切り刻みましょ~」

「怖いよー!？」

「ヒカル、わざわざいつと嘘つこてましたね」

「倒したことがあるへりこ言わなこと、心配されるだろ」

「そうですね、いい嘘だと思いますよ。馬鹿正直だった主が、ちゃんと嘘もつけるようになつてうれしいです」

「へいへい。んじゃ行こうかね

「まあは、村長さんのところでしたね」

そして、魔法使いは家を出たのだった。

第七話「魔法使いと魔力食い」

フウリを待たせて、村長の家の玄関をまたぐ。

「ちわー」

「挨拶くらこちやんとせんかー！」

いつも集会をしている部屋にクリスが行くと、昨日とほぼ同じ面子が集まっていた。

「すんません。それで、村長。昨日は言いそびれましたが、少しの間村に滞在したいのですが、よろしいですか？」

「う、うむ。それは問題ないが。敬語を使われるのも、ちとむず痒いの。というか、滞在なのか？住まないのか？」

「ええ。王都の学校を卒業したので、家族の様子を見に帰つてきた次第です。少ししたら王都に戻りつつと思します」

途端、ざわめきが広がる。

「王都の学校だとー！」

「嘘だろ・・・」

「木の棒しか持たないで出て行つたって話なのに」

「王都の学校で雑用してただけなんじや」

「俺の色本・・・」

村長が一喝する。

「静まらんか!」

すぐには静寂が戻る。

「して、王都では何を学んだのだ?」

「魔法について少し」

「む、そうなのか、てっきり剣術だと思つてたのだがな、あと喋り方はいつも通りでいいぞ」

「ひやつほー! 敬語とかあんまり使わないから疲れるんだよね!」

クリスは村長の言葉を聞いて、すぐにはしゃげる。

「はあ、お前という奴は・・・まあいい。お前が望むなら村の空家を貸してもいいから、村に残る気はないか?」

村に魔法使いがいれば、実力なんて無くても、何かと役に立つし、字の読み書きが出来るというだけで貴重なのだ。

「うーん、まだやり残した研究もあるし一度王都に戻るよ。師匠にも恩返ししたいしね。けど暫くはいるつもりだし、戻った後もちよぐちよぐ帰つてくれるよ」

「そりが、残念だが、仕方ないか

「すんません」

「よいよい。ところで他の者には挨拶してきたのかの？リリイは特に心配しておったんだぞ？」

「このあと行つて来るよ

「ふむ、この時間なら、皆畠だな。ちゃんと顔を見せに行くんだぞ」「はーい。あ、それと村長、森になんかいるじやん？あれの件なんだけど・・・」

クリスが本題に入ろうとしたところで、部屋のドアが開く。

「村長！大変です！」

件のリリイの妹、コリイが息せき切つて入つてくる。

「どうした、ユリイ！？」

「ね、姉さんが、森に入った子供たちを追つて森にー。」

集まっていた村人が騒ぎ出す。

子供たちとは、騎士団の面々である。

「子供つていうとあの悪ガキどもか！」

「なー森は今やべえんだぞ！」

「化け物がうるさいってんだ！」

「すぐ呼び戻しにいかないと」

「けど、魔物だって何体も食い殺されてるんだぞ、俺たちで行って
も・・・」

「おー！子供を見捨てるってのか！」

村長が立ち上がる。

「静まれ！」

「だけど、村長ー。」

「おぬしらが騒いでも仕方ないだろ？ーすぐに若いもん集めて森に
行こう」

「あ、村長」

クリスが声を上げる。

「クリス、今状況を説明している暇がないんだが、森と一緒に来て
くれんか？」

「ああ、森に行くのはいいんだけど。先に行くから、村の人は森の
入り口で待つてもらえないかな」

「おい、何言つてゐんだ！今、森には化け物が！」

「正体も分かつてゐから。ちやちやつと倒しちやうかひれ。森の入り口で子供たちを頼むわ

「しかしなー」

言い募る村人を押し戻して、村長が決断する。

「分かつた。子供たちとリリイを頼む

「村長！？」

「クリスの『』の腕は、おぬしらも知つてゐだろ？ 魔法も使えるんだ。わしらがいても邪魔なのだろ？」

「村長がそう言つなり・・・」

村人たちは村長の説得にしぶしぶ引き下がる。

「そんじや行つて来る」

クリスはそう言つと何か呟き、瞬間村長らの目の前から焼き消えた。

フウリは、村娘が村長の家に駆け込んだとき、クリスに契約を通し

て話かけていた。

『主、何や？』慌しくこちらに向かつた娘がいましたよ』

『うそ、今ちょうど来たね』

少し途切れながら、クリスが慌てて言つ。

『ますい！子供が森に入つてそれを追つて娘も一人入つたらしい…』

『森は魔力食いの狩場になつてますから、危険ですね』

『すぐ追いつくから、先に行つて子供たちを探してくれ』

『分かりました』

フウリは浮き上ると、急いで森に向かつ。

フウリは森に着くと、昨日助けた火精靈の戦つている気配があることに気づく。

『主、昨日助けた精靈が戦つているようです。たぶん相手は魔力食いですね。人の気配もします』

『すぐ行ってくれ、俺もフウリを印に向かつ』

『分かりました』

フウリは戦いの気配がするほつへ急ぐ。

クリスも、フウリの補助が無い中、なけなしの魔力を使い高速で移動する。

「頼むから、無事でいてくれよーー！」

魔法使いは祈り、さらに加速する。

第八話「魔法使いの幼馴染」

火精靈が魔力食いと戦っている後ろで、子供たちが泣きじゃくり、村娘がなんとか子供たちを逃そうとしている姿がフウリの田に入る。

フウリは急降下しつつ、魔力食いに風の刃を無数に叩き込む。

ふわりと、フウリが火精靈の前に降り立つたときには、魔力食いがいたところは、地面が抉れ土煙が立ち込めていた。

「間に合つたようで良かつたです。そここの娘、子供たちは全員いますか？」

村娘、リリイは田の前で起きた事象に一瞬呆然とするも、すぐにフウリの質問に答える。

「は、はい、皆います！」

「それでは、急いで逃げてください。私たちが足止めしますので」

土煙がはれてくると、つゞめく影が見える。

「分かりました！ほら、皆立つて！逃げるよー！」

しかし、子供たちは泣きじやくり、なかなか移動しようとしない。

そして、魔力食いが襲い掛かってくる。

魔力食いは、オーケの変異のよつだがほとんど原型を留めておらず、

体中から黒い霧のようなものを撒き散らし、腕を振り上げて攻撃してくる。

「ぐ、存外早い攻撃ですね・・・！」

避けると、後ろにいる子供たちに当たってしまうため、避けるわけにも行かず、フウリは魔力食いの攻撃を風で防ぎ、いなしている。

火精靈も隙を突いて攻撃するが、消耗が酷く有効打にならない。

「魔法に対する耐性も半端ないですしねえ・・・まあ私は時間稼げばいいので」

そう言つと、フウリは突風を起こし魔力食いを吹き飛ばす。

しかし、魔力食いはすぐに木を蹴つて戻ってきて、腕を振り下ろし攻撃する。

「守りながら戦うのは久しぶりです。主はあまり守らせてくれませんからね。しかし、もう終わりです」

フウリは魔力食いの攻撃を風で受け流し、体勢が崩れた隙に風の刃を数発叩き込み、足止めする。

瞬間、魔力食いの姿がぶれたかと思つと、真つ二つになり崩れおち、黒い霧となつて消えていく。

成り行きを見ていたリリイは何が起きたか理解できなかつた。

「遅いです、主。落第点です」

魔力食いの消え去った後にはクリスが立っていた。

「厳しいな！フウリがいないし、魔力もろくにない状態で、こんな急いできたのに！むしろピンチに来て颶爽と悪を倒した白馬の王子さまじゃないか！っていうか本当に切れてびっくりだわ！なんか黒いの出てたけど、呪われないよね！？もう呪いは嫌なんだけど…」

「次からもう少し早く来てください、危うく本気を出すところでした。あと、主の剣なら切れるって言つたじゃないですか。呪いは分かりませんが、魔剣が粗方吸つてたようなので、もしかしたら何があるかもしれませんね。よかったです、主」

「おいいい、無理無理！魔剣何食つてるのおおおおーダメでしょ！ぺつてしなさいー！」

剣を振り回すクリス。

そこで、リリィと子供たちに『氣づき襟を正す。

「ま、まあ、なんにせよ、無事でよかったです。皆怪我はないかい？リリイも久しぶりだね？」

クリスはとにかくいる服がぼろぼろになり、枝が刺さっていたり、顔に傷ができる。

そんなぼろぼろの状態でリリィに近づくと、キザつたらしい笑みを浮かべ手を差し伸べる。

「主、その顔は気に障るのでやめてください」

「おま、気に障るつてひどくない！？」

田を白黒させたリリイがやつと答える。

「えつと、そこの女性が守つてくれたので皆怪我は無いですけど」

そして、落ち着いて助けてくれたであろう青年の顔を見る。

「・・・あ、あー！クリス君！あれ！？何でいるの！？帰つてきたの！？その女人だれ！？っていうかさつきの化け物なに！？どうなつたの！？」

リリイは村でも元氣がよく、その容姿と相まって結構村の男にも人気がある。

「おつと、帰つて村長に報告しないと」

しかし、疲れているところでの質問攻めに答えるのは面倒だとクリスは判断し、踵を返す。

「ちよ、ちよっと待つてよー置いてかないでよー」

「後は任せた、フウリ」

「面倒を押し付けないで下せー」

「め、面倒つてどうゆうことー？クリス君！」

「俺、ここまで超特急で来て、本當になけなしの魔力まで使ってふ

「ひがりなんだよフウコ」

「私も疲れました、帰つて寝たいです」

「お前寝ると回復するのか・・・?」

「あるわけないじゃないです、気分です」

「ですよねー。んじや、一人で帰るか。家まで飛んでく?」

「いいですね。面倒事はいつも後回しにする主のその姿勢、私は好きですね」

「うがあああー無視するなー!」

「うがーって年頃の娘が上げる声じゃねえぞー慎みたまえー!」

「そうですね、いつもそこですよ娘。主との癒しの時間を邪魔しないでください」

「ふ、一人してなにかーそんな怒鳴らなくてもこーじやんーっていうか説明してよー!」

「俺は毎回あんまり癒されないんだけど、じつはつてゐの」

「仕方ない主ですね。今度とびっきりの癒しを私が提供しましょう」

「お、なになに?精霊の癒しなんて、俺想像つかないなあ」

「無視しないでよお」

「落ちるのと、上がるの、どちらがいいですか？」

「おじまでや、なんか不吉な感じがするぞ・・・？」

「いえ、ただ急降下するか急上昇するかの違いですよ。どちらがいいんですか？主も欲張りですね」

「あぶねえよー？癒されねえよー？欲張らねえよー？」

「私はそれをすると癒されます」

「お願いだから無視しないでえ」

「やっぱ、癒されなくていいわ・・・」

「我ままな主ですね」

「うひ・・・、クリス君が数年ぶりに帰つてきたと思つたら、私を無視して知らない女の人にこちやこちやしてゐううう」

黒い霧が晴れ、森はにぎやかになつてゐた。

第九話「魔法使いの飴」

やつと泣き止んで周りの状況を理解しだした子供たちに、クリスがいつも持ち歩いている飴をあげることで収拾を図る。

「ほり、王都でも有名なお菓子屋の飴だぞー。一個ずつやるから並べー。みんな食べたら出発だ」

「さすが主。昔は年下しか遊び相手がいなかつただけあって、そういうことは上手いですね」

「ど、同年代の友達もいたわー。」

「え？」

クリスから飴を貰おうと列に並んでいたリリイが疑問の声を上げる。

「いい度胸だ、お転婆娘！おまえにはやらん」

「ああ！嘘嘘！クリス君友達いっぱいいたよー本当だよー！」

必死にフォローするリリイ。

「ところでフウリ、火精靈は大丈夫なのか」

「はい、先ほど指輪に少し溜まっていた主の魔力を頂いて、渡しましたので消滅はしないでしょう。あとは魔力食いもいなくなつたので、元の棲家にいれば、すぐ回復するでしょう」

契約していない人と精霊が魔力のやり取りをするより精霊同士でやり取りをしたほうが楽なので、クリスはフウリに火精霊の面倒を任せていた。

「あ、あの、クリス君、私も飴ほしいなー、なんて」

「ならよし。フウリ、火精霊をその棲家に運んできてくれるか?」

「分かりました。運び終わったら主の所に行つたほうがいいですか?」

「うーん。たぶん村長の家で説明会だから、フウリは先に家に戻つて休んでいいよ」

「あの、飴・・・」

「また、私が倒したことにしてしまいますね」

「てへ」

拳を頭にのせ、舌を出すクリス。

「気持ち悪いです主」

「すんません」

「うう・・・またクリス君がー！」

「うむむこトだなーほら、飴あげるからじょっと黙つてなさい」

「やつた！」

嬉しそうに飴を手に取るリリイを見てため息を吐くクリス。

「見た目だけ大きくなつて、中身はあのままなのか」

「んー？」

リリイは飴に夢中で聞こえていない。

「なんでもない」

もう一度、クリスはため息をつくとフウリに向かう。

「んじゃ、そっちは頼んだ。いつませ、ませ、フウリをアラジ半端ねえつす、つて感じにしどくから」

フウリが呆れたように囁く。

「たまには自分の手柄にすれぱいにじやないですか。私は人間に尊敬されるのも畏怖されるのもどうとこうことはないのですが。主が下に見られるのはあまり我慢できないんですよ。」

「『ドリゴンキラー』でお腹いっぱいなんだよ！あの時だつて決闘申し込んでくる奴とか、闇討ちまがいに狙つてくる奴とかいて大変だつたんだから・・・」

やたらプライドの高い王都の騎士団員が、新しいドリゴンキラーが冒険者だと聞いて闇討ちするも逃げられ、その数日後に逆に闇討ちされたとか・・・

精靈に対抗意識を燃やす人間はまずいないので、手柄をフウリのものにしたほうが波風が立たないとクリスは思っている。

「まあ、いいでしょう、分かりました」

「助かるわ。さすが我が精靈さま、愛してるぜ」

「はいはい。それでは火精靈を運んできますので」

嬉しそうな顔をして、火精靈を抱えるフウリ。

「ほい、気をつけて」

「よし、じつも行くぞー。森の入り口に村長たちがいるから、さつさと安心させてあげるぞー」

「ふあーー」

飴を口にいれながら返事をするリリイ。

子供たちも、甘いものを食べて元気が戻ってきて、立ち上がり歩き出す。

「なあなあ兄ちゃん、その剣本物なのか！？」

「触りさせてくれー！」

「あのお姉ちゃんたち大丈夫かな？」

「あ、あんな化け物、僕一人でも退治できたし！」

「お前泣いてリリイ姉ちゃんにしがみついてたくせにー！俺は泣かなかつたぜ！」

「なんだとー！」

「ねえねえ、クリス君、飴玉もつ一個頂戴？」

子供たちプラス1が騒ぎながら森を移動する。

「この剣は一応本物だぞー、ただ今抜くと呪われそうだから抜けないけど。あのお姉ちゃんたちは心配ないよ、家に帰って休めば良くなるんだと。あんな化け物一人で退治できるなんてすごいなー、けどこれから村長たちによる地獄のお説教大会で坊主が退治されちゃうかもなー。あとそっちの坊主は泣かなかつたかもしれないけど、ズボンの染みをどうにかしような。そしてリリイ、再会して早々こんなこと言つのもなんだけど・・・」

「え、なに？告白？さすがに急すぎるよ？私困っちゃつ

「あー、うん。お前五年前と全然変わつてないなー」

「そ、それどういう意味？」

「可哀想に・・・」

哀れみの視線をリリイに送るクリス。

「え？え！？どうゆう意味だ！？」

リリイを無視してクリスが子供たちに視線を向ける。

「さーて、入り口が見えてきたぞー。坊主ども、しつかりこつてり怒られてこいー。ついでにリリイも怒られろー！」

「わ、私怒られないよね？助けに行つただけだもんね！？」

「さあなあ。つと、村長ー！」

クリスは、前方に見えてきた武装した村人たちの先頭にいた村長に手を振る。

村人たちは急いでクリスたちのほうに駆けてくる。

「ぐ、クリス！みんな無事か！？」

「うん、みんな怪我も無し。健康そのものなので、しつかり頼みまーす」

「うむ、引き受けよう。しかしどりあえず、村まで戻らんとな。子供たちの家族も心配してるしの」

村長先頭で、子供たちを囲いつようにして村に戻る。

「これは久々に腕がなるぜ・・・！」

「初代以来の大仕事だな！」

「初代は更生できなかつたからな、こいつらはあんなことさせない・・・！」

「もちろん、リリイも一緒に説教だな。あのお転婆娘が！」

「ローテーションは、いつも通りでいいか。まずは両親、次に村長、あとは順々にこいつ

等々、説教に妙なやる気を見せる大人たちに囲まれ、青い顔をする子供たち、プラス1。

「ね、ねえ、クリス君。私も説教されそんなんだけど。た、助けてくれないかなーなんて」

「しつかり受けておいで。骨は拾つてやるから」

「み、見捨てないでよお」

リリイはクリスの袖を掴む。

「ま、命があつただけいいじゃないか！あれも慣れてくるとなかなか赴きがあるよ。俺はもう一生分受けたから全力でお断りだけど…」

「だ、だけど。一応私は、皆を助けに行つたんだよ…」

「結果、家族にも村のみんなにも心配かけたんだぞ」

「むう！クリス君だつて、村出て行つたとき、家族にすゞい心配かけたんだよー私も心配したし…」

「残念。それはもう昨日、母親に殴り倒され、弟に絞め殺されそうになつて清算されました」

「私の心配はー！」

「今日助けたのちやうらです」

「ぐぬう」

「ほひ、飴やるから、元氣だせつて」

「わーー！ありがとーー！」

（なんとこうぢゅうじゅ。まあじひせ、リリイも子供たちも夕飯食えないだろいしなー）

村の篝火が見えてくる。

そして、村の入り口にはお母様集団が待ち構えている。

魔法使いが旧友と親交を暖めている中、そのときは刻一刻と迫ってくるのだった。

第十話「魔法使いとお風呂」

鬼の形相をした親たちと共に、村長の家に数年前にできた、通称説教部屋に子羊たちが引きずられていくところを確認すると、村長はクリスに言つ。

「今日は長引きやうだの。とりあえず、疲れてるかもしれないが、こつちも話だけ聞かせてもらつていいかの？」

「了解、村長の家で？」

「つむ、あの様子だと第一陣は母親たちだらつから、順番待ちしてゐる者にも聞かせよつ」

説教は親と村の主だった者たちがやるので、順番待ちの部屋は重要な話をするのに丁度いい。

「順番待ち・・・なんという説教地獄」

「おぬしのせいで出来たのだがな」

「さて、行きまじょうか、村長さまー。」

「はあ、これ走るでない」

村長はため息をついてクリスを追いつく。

村長の家で、時々漏れ聞こえる怒声や泣き声を聞き流しつつ、クリスは森であったことを、村長と順番待ちの部屋で説教に向けて各自作戦を話し合つたりアップしていた面々に、少し事実を曲げて説明した。

「ふむ。では魔力食いが魔物が森に住みついて悪さをしてたのかの。それであの子たちはそれに襲われていたと」

「そそ。それで、それを森にいた精霊と、俺と契約してる精霊が倒したと」

村長が目を瞑つて何か考え、ゆっくり目を開ける。

「昔、旅の人聞いた話だと、魔力食いというのは精霊を食べるといつことだったんだがの」

クリスは、立ち上がりて腕を振り上げ、捲くし立てるよつこじゅべりだす。

「おーおい、村長さんよ。うちの精霊、フウリサマをなめないでもらおうか！ そんじょそこらの精霊とは訳が違うんだぜ！ 風精霊ならではの用途に応じて使い分けることができる機能に富んだ魔法、すばやい移動速度と魔法行使、気配察知、遮断もお手の物。風精霊というと攻撃力が無いと勘違いする素人もいるが、あれは間違いであるとここで断言しよう！ 風の刃による微塵切りから、突風による磨り潰しまでなんでもござれの多種多様な攻撃！ 他の精霊と組めばその脅威は更に増す！ それに加え、手前事で悪いけど、うちのフウリ

はそれはもう美人だし、気が利くし、やさしいところもあるし、実は最近料理に興味を持つたりと家庭的なところも見せ始めて、そこと普段とのギャップがそれはもう言いようのない気持ちを俺に抱かせるんだ！ああ、もちろん欠点みたいなものもあるよ？主に対して口が酷く悪いとか、心の柔らかい部分を抉つてくるとか。けどそういうところも含めてもあいつと契約したこと俺は後悔しないよ？なんていうのかな、契約とは別に信頼つていうのかな、そんなものがあいつと俺の間にはあるんだ。だからあいつには安心して背中を任せれるし、あいつも同じだと思つ。はは、ちょっとくさかつたかな、けど本心なんだぜ。まあ結論を言つと、フウリは魔力食いなんかには負けないぜっていうことなんだ」

周りの村人は呆然とそれを眺める中、クリスが座りなおす。

（（（結論と関係ない話が間に長々と挟まっちゃつてたよー！？）））

我に帰つた村人たちは、そんな感想を一様に覚えるが、皆が突つ込む前に、村長が一息吐いて言つ。

「う、うむ。お前と契約した精霊さまの話はよく分かつたぞ。しかしどちらにせよ、お前のおかげで、本当に助かつた。ありがとう」

村長と、集まつていた面々は深く頭を下げる。

煙に巻けたことにクリスは安心し、同時に謝罪されて妙に居心地が悪くなる。

「勘弁して。そんな」とされると、散々迷惑かけて出て行つた身としては逆に座りが悪いつす」

クリスがやつらのと、眞顔を上げて口々に好き勝手言こ出す。

「確かに違和感あるな、昔は「」でクリスをいかに反省させるかを考えたわけだしな」

「世の中分からないもんだなあ」

「クリスのくせに俺らに頭下させるなんてな」

「こきなり惚氣だすしな」

「そもそも、家庭的で氣の利くちょっときつめな美人の精靈まと契約だあ！？」

「しかもセルフで言葉責め！」

「クリ坊のくせに生意氣だ！」

「つかのかかあと代えてくれ！」

「つていうか、元はといえば初代が悪いんじゃね？」

「お、それ俺も思つた」

「おい初代、お前も説教参加していけよ、もうちりんされる側で！」

たまらず初代が絶叫する。

「変わり身が早い上に、割とひどいなあんたたち！..」

「つむせえーお前が作ったんだろ、あのいたずら集団ー責任どれー」

「俺の色本も責任とつてくれー！」

皆、悪態を吐きつも、嬉しそうにクリスをもみくちゃにする。

「ほれ、クリスも疲れてるだろ。それくらいにせんか、お前たち

村長がたしなめ、場を静める。

「まあ、じつやつて言ひ合ひが氣が楽でいいかな。けび、雲行き怪しいからそろそろ帰るわ

「うむ。明日は久々に狩に出れるから、馳走を期待してくれ。宴を開くぞ」

「はーい、母さんと弟にも伝えてくれよ」

「つむ、頼んだぞ」

そして、村長とその他の人々、あと怒声と懲戒の声に見送られてクリスは帰途についた。

クリスが玄関を開けて家に入ると・・・

「に、い、れ、あ、ん、」

ジョシュがタックルしていく。

と、それを寸前の所でマリアンが首根っこを掴み止める。

「おかえり、クリス」

「おかえりなさい、主」

玄関には、ジョシュを取り押さえたマリアンと、フウリが立つていた。

「ジョシュはどうしたの？」

「あんたが森に魔物退治に行つたって聞いて、自警団に無理やりついて行こうとしたのを私が止めたから、ずっと玄関で待つてたのよ」

「それはまた・・・心配掛けたな」

クリスがジョシュの頭を撫でる。

「ちちゃんと魔物も倒したし、明日は宴だと」

「分かったわ。フウリちゃんもさつき戻ってきていろいろ手伝ってくれたのよ。お風呂も水入れ替えて沸かしてあるから入っちゃいな」

クリスはジョシュの頭から手をどかす。

「お皿葉にせんべいの風呂に行ひつかね」

「主、背中流しましうか」

「兄さん、背中流すよ。」

「む?」「え?」

フウコとジョシュの視線がぶつかる。

「あらあら。クリスもてもじやない」

面白やつてマコアン。

「とつあえずジョシュは、昔俺の背中を力一杯擦って傷だらけにしたことを悪い出せ」

「う、ごめんなさい」

ジョシュが下を向いてしゃんとする。

「それはすじですね。なかなか主の背中に傷をつけられる者はいませんよ。誇つていです」

クリスの身体能力を知っているフウリが嫌味無しに言ひ。

「まあ、かわいい弟だしな。最初は我慢したんだけど、段々強くなつていつてな・・・」

「あのときは凄かったわ。ジョシュが大慌てで呼びにきて、行つたらあなたは血だらけで倒れてるし、なにがあつたのかと思つたわよ」

「ううう……」

ジョシュが涙目になつてきたので、クリスがフォローする。

「ま、まあ、今田は疲れてるから、また今度一緒に入ろうな」

そう言つとジョシュは、ぱあっと顔を輝かせて頷く。

それを見届けて、クリスは風呂へと向かう。

その後ろを当然のようについていくフウリ。

「おー、フウリ。ついて来るな。お前も少し反省しろ」

「おかしな主ですね。私はこれと言つて、お風呂詰みで反省するようなことは無かつたと思いますが」

「ほつほつ、黄、有名温泉地に突如謎の龍巻が発生して被害が出たことに関する弁明を聞こつか？」

「何を言つているんですか主。あれは事故です、自然現象です。乙女の柔肌を見ようとした不埒者以外に人的被害も無かつたからいいじゃないですか。ついでに削られたところから温泉も出て万々歳。いい事したあとは気持ちがいいですね？」

「阿呆か！その不埒者は一応一緒のパーティーを組んでたんだぞ！再起不能一步手前まで追い込むなよ！せめて、おどりにできる状態

くらいで我慢しろよ！おかげで後に控えてた依頼を俺一人で処理しなくちゃいけなくて、指輪に呪われたりで俺も再起不能になりかけわ！」

「では主は私の肌を人間の男に見られてもいいのですか？見下げる主ですね」

「あれ、それはなんかむかつくな。今度あいつらに会つたら九割刻むか」

「いいですね、去勢しましょ」

「同じ男としてそれは許してあげて・・・」

結局、魔法使いとその精靈は言い合ながら、風呂場へと消えて行くのだった。

第十一話「魔法使いの指輪の秘密」

「やっぱ自分のベッドは落ち着くなあ

お風呂から上がって、『ご飯を食べたクリスは部屋のベッドに「ダイブ」してしまっている。

「それはいいですが主、魔剣を抜いて見ましたか？」

フウリは机の椅子に座つてお茶を啜つてゐる。

「おこやめり、俺の今一番気にしたくない事ランキング第一位に堂々と突っ込みをいれるな。触れないようにしてたんだ。ちょっと時間置いて魔剣があの黒いの消化してからでいいじゃん」

「消化するような器官はある魔剣にはついていません。もひ取り込んでしまつたでしょう。抜いてください」

お茶を置いてクリスに詰め寄るフウリ。

「え、なんでそんな積極的なフウリさん」

「私の推察が正しければ、その魔剣、面白い事になつてますよ

「ちなみにその推察とは？」

興味を持つたクリスは聞き返す。

「ふむ、説明したほうが主も安心できそうですね。それでは説明し

ます。まず、あの魔力食いの黒い霧ですが、いろいろな説があります。あれが魔力食いの本体だとか、あれは取り込んだ魔力が大きすぎて体から溢れているとか。個人の見解ですと、黒い霧は一種の消化器官だと思っています」

「消化器官・・・他の生物の魔力をあれで消化して自分のにしてるのか」

「そうです。普通、面倒な手順を踏まないとできない生物間での魔力の取引を、一方的にできるようにしているモノがある黒い霧だと推察します」

「あれけどそれなら、うちの魔剣もできないつけ？」

「あれは相手を切つて体内に刃が接触しないとできません。十分面倒な手順でしょう。ついでに吸引するだけで、その魔力で出来ることも限定されますし」

「なるほどなあ」

「世界からの魔力供給を一切できない魔力食いが、あの黒い霧によつて他の生物から魔力を食らつて生きている。そこまではいいですね？」

「さすがフウリ先生、教え方も上手くて素敵！」

学院時代、クリスの追試前には付つきりでフウリが勉強を教えていたので、教えるのはお手の物だ。

「もつと褒めていいですよ?」

「続きを期待」

「仕方ない主ですね。それで、元々黒い霧と魔剣は似ているといふもありますので、うまく吸収できていれば、黒い霧の力が使えるかも知れないと思つのです。魔剣からもほんのり魔力食いの力を感じますしね」

「フウリ先生質問がありますー。」

手を上げるクリス。

「はい主、そこで二回回ってワンと鳴いてから質問をビリダ

クリスを指し、ついで床を指差すフウリ。

「学院の変態教師どもでもなかなかそんなこと言わねえよー・?じやなくて、結局うちの魔剣ちゃんは何ができるよになつたの?」

「ふむ。黒い霧は取り込んだ魔力を完全に自分のものとして扱えるようになる器官だとするなら、本来なら魔剣に蓄積した魔力は切れ味向上と斬撃を飛ばすことしか出来なかつたのが、主の好きにできるようになるんじゃないかなと思います」

「おお・・・!?.」

「つまり、擬似的に魔力量が増えて、しかも回復量も増えた上に、切れば切るほど魔力が回復する、ということになつてるかもしれませんですね。ああ、主の研究がまた一步進むかもしれないのです、すぐ抜きましょう」

フウリはクリスに剣を抜くよう急かす。

「お、おう。それじゃあ、抜くぞ？抜くからなー！？」

クリスは、恐ろしいものを触るかのように剣を手に取る。

「早くしてください、へたれ主」

「あはい」

意を決したようにクリスは剣を抜く。

しかし、特に何も起こらない。

「ん？ 何もなさそうだよ？」

「本当にお馬鹿さんですね主。魔剣の魔力を使わないと分からないでしょ。そうですね、剣を握って私に魔力を送るイメージをしてください。どうも私からは奪えそうに無いので」

「ほほう」

クリスは目を瞑つて、契約で出来ている自分からフウリへの魔力の流れに、剣からも魔力が流れるようにイメージする。

「ふむ。これはこれは」

フウリが楽しそうに呟く。

「お？ できた？」

クリスが口を開けて聞く。

「ええ、ぱっちりですね。しっかり流れ込んできて、主の魔力の味がします」

「え、どうこいつことなの」

「簡単に言つと、魔剣は自分の魔力を主の魔力に限りなく味を似せているのです。なので、剣を通して魔力を使う他に、主は簡単に剣の魔力を自分の魔力として取り込んで使うこともできるようですね。けど、魔力の所有者は魔剣なので、いくら味が似ていっても直接私が奪うことはできないのです」

「おおーー・自由にできる魔力がふえたのか！」

クリスは喜び剣を抱く。

「そうです、よくできました。けど、主が魔剣から魔力を吸い取ればそれは主の魔力なので、私の好きにできます。喜ばしいことです」

フウリの言葉を聞き、剣を置きながらクリスがつぶやく。

「なんか魔力が増えたと思つたら、結局そうでもなかつたような感じになつてる件」

「いえいえ、切れれば切るほど魔剣の上限までは使える魔力が増えますよ。よかつたですね。早速ドラゴン狩りに行きましょうか」

「過激発言禁止…そもそも魔剣は今お腹いっぱいなので切っても取り込めません！」

クリスが腕を交差させ、フウリを止める。

「魔剣から主を通してその指輪に魔力を送つて、魔剣の空きを作ればいいじゃないですか。ああけど、ちょっと容量が足りないようなので、その指輪を量産しないといけませんね」

「無茶言つなーこの指輪の元、どんなもんか知つてるだろーー時期この指輪に呪われて大変な思いしただろうがーー」

「やつにえ、主が遺跡にあつた指輪を何の疑いも無く手にとつて、危うく契約が切れそうになりましたね」

しみじみと思ひ出し、フウリが言ひ。

「その節は大変ご迷惑をおかけしました、すみません」

クリスはすぐにフウリに頭を下げる。

「まあ、いいでしょ。魔剣の確認も出来たことですし、やつを寝ましょーか」

「おひ。今日は一緒に寝ないからなー」

「主は私に床で寝るところのですね」

「おこ、現在進行形で浮いてるだらうが」

「遙かなどと叫ばなこでへださこ、浮こてゐるのせせの存在ですすみ

「アツチの浮べじやないーーーたへ、やすがに疲れてるからひつ寝

る」

そつ言ひてベッドの端に寄る魔法使い。

精靈が空いたところに潜り込む。

結局、一緒に寝るのだった。

第十一話「魔法使いと周りの国々」

晴れ渡つた朝、クリスとフウリは魔力の都合がついたので、火精靈が養生している洞窟へ向かう。

「ところであの火精靈さん、格高いの？」

「なんですか主。私以外の精靈に興味津々ですか？浮氣ですか？」

蔑む様にクリスを見るフウリ。

「突拍子も無いこと言つねお前！」

「冗談です、半分くらい。あの精靈はなかなかの格ですよ、私と同じところにいても逃げないくらいには」

「そう考えると、凄いよな。大抵の精靈はフウリにあんまり近寄つてこないからなあ」

「似たもの同士ですね、主と私。少し照れてしまります」

フウリは表情を一切変えずに言つ。

「真顔で言わないでくれる？しかも俺は別に人が寄つてこないわけじゃないよー？」

「何を言つかと思えば。主、良く思い出してください。あのいろいろぶつ飛んでる友人たち以外に主に友達がいますか？人間の、ですよ

「えっと・・・あれ・・・？吸血鬼とか竜人とかもだめ？人間に似てるじゃん、あ！エルフ！エルフはセーフでしょ？」

クリスはギルドの関係で変な人脈はあるのだが、まともな友達がない。

「一般的な友人はほとんどいませんね、それが現実です」

「う、うそだと書いてよフウリい・・・」

がっくりと膝をつくクリス。

「大丈夫です、主。例え主が世界を敵に回しても、私は主の味方ですよ？」

「え、なにこれ、うれしい」

クリスがぱつと顔を上げフウリを見る。

「一度世界を壊してみたいと思っていたんです。二人の楽園を築きましょうね」

フウリが薄く笑つて言う。

「過激すぎるわー普通でいい、普通の友達がほしい」

地面を叩きながらクリスが言つ。

「あのぶつ飛んだ人たちと付き合つている以上無理でしょう。主も

「ぶつ飛んでますしね」

「他国ならできるかもしれん！」

「頑張つてください。ただ、ガイエン帝国では、主は要注意人物としてマークされてるので、気をつけて旅行しましょうね」

ガイエン帝国は、クリスのいるオーカス王国の西に位置している大きな領土をもつ軍事国家である。

「て、帝国以外にも国はあるじー！」

「ほうほう。あれですね、主のせいで停戦交渉してるグルーモス王国ですか？あつちはまだ交渉中なので危ないですよ？」

グルーモス王国はオーカス王国の南にあり領土問題で何度も戦争をしている。

戦力的にはオーカスが圧倒するのだが、帝国が支援しているため、なかなか決着がつかずになっていた。

「トライン聖王国が・・・！」

トライン聖王国はオーカス王国の北にある宗教国家だ。

「ふむ。お姫さまを主が誑かした国ですね。王様が親馬鹿でしたね。あそこの王族は天使の気配もほんのりしたので、あのときは生きて出れただけでも有難いと思いますよ」

「勘違いだあれは！――つていうか、あれ。俺がここの国から出るの、

大変じゃね？」

「さて、主が現実を認識できたといひで。あの洞窟が火精靈の棲家です」

前方を指差してフウリが言ひ。

「はい・・・」

クリスはフウリの先導で洞窟の奥へと進む。

「ほー、これは結構魔力が溜まってるな」

関心したようにクリスが呟いていると、火精靈がふわふわとやってくる。

「ほんやりと人型を取つてるとこには、かなり高位?」

「そうですね、今は消耗しているので、ほんやりですが、回復すればくつきりするかもしませんね」

「すぐに魔力を渡すんだ、フウリ」

「何で急にやる気になつてるんですか主。ああ、そういうとこですか、相変わらずむつりですね。私と初めてあつたときも拳動不審でしたよね」

「ちちち、違うし、別に裸田当てとかじやねえし、勘違いするなし」

「主、盛大に自爆します」

ある程度、人の世界に興味を持つていてる精霊以外は服というものを知らない。

知つても、理解できない精霊がほとんどだ。

フウリも契約当初は全裸だった。

クリスが必死に教えて、やっと魔力で服を作るよつになつたのだ。
クリス曰く、ちょっと見れるのはじきじきするけど、四六時中となるとその限りではない、そうだ。

そんなフウリも最近では、料理と共にファッショントリノにも凝るようになつていてる。

「それでは魔力を渡しますよ」

そう言つと、フウリはふわふわ浮いていた火精霊を抱き込む。

すると段々一人が光つていく。

クリスは期待に満ちた目でその光景を見守る。

光が收まると、そこには子供の姿の火精霊が立っていた。

「へそ！幼女じやねえか！責任者呼んでこいー！」

絶望した魔法使いの声が洞窟にこだまするのだった。

第十二話「魔法使いと火精靈」

フウリは絶叫するクリスの方を向く。

「主は本当にどうしようもないですね。少し黙ってください」

「だけど、俺の期待が！」

「それ以上言つてるとねじきりますよ？」

フウリは視線を少し落として言つ。

「黙ります！」

背筋を正し、敬礼するクリス。

「よろしい」

そう言つと、フウリは火精靈に近づき、膝を落としあでこを合わせる。

数秒すると、フウリは火精靈から離れる。

火精靈は再度光に包まれると、今度は白いワンピースを着て立っていた。

こうして見ると、人間の四、五歳くらいの子供にしか見えない。

「ふむ、白い肌と服の色が合つていて似合いますね。我ながらいい

見立てです

「かぜの セイレーラー ありがとう」

火精靈が礼を述べる。

「つむ、幼女精靈が話とる」

驚くクリス。

「ええ、言語と服の情報を伝えたので」

「さすが、風精靈。情報の伝達はお手の物だねー。」

「私ほどになると、マッチした服を着せることもできるわ」

胸を張るフウリ。

火精靈はそんなフウリとクリスを交互に見る。

「こちらが私の主です。ぶつ飛んだ変態無職のダメ主ですが、やれ
ばできる子なんですよ」

「いいところを一切言わないだとー。」

「主のいいところですか。あまり難しい話を振らないでください、
困ります」

「一個も出でこないぢりか難しい話扱いかよおおおおおお

「興奮しないでください、火精靈が怯えてします」

「む、精靈とは言え、子供に怯えられるのはいい気がしないな」

クリスは居住まいを正すと口を開く。

「森の精靈さま。村の子供たちを守って頂いたこと、感謝致します。
ありがとうございます」

丁寧に謝辞を述べるクリス。

しかし火精靈は首をかしげる。

「わたし かぜの せいれいさまに たすけられた だけど やく
そく まもれなかつた」

たどたどしく火精靈が言つ。

「うん? 約束? フウリ、何か約束したの?」

「ええ。助けたときに、森に入ろうとする人間を止めるように」と

フウリが思い出したように言つ。

「にんげん もりに はいったから そこに だそつとした」

火精靈が続ける。

「それで、魔力食いと遭遇して戦つてたのか。いや本当に子供たち
を守つてもらつて助かりました」

「わたしは にど たすけられた」

「ふむ。主、この火精靈と契約しませんか？」

何か考えている風だったフウリがクリスに言つ。

「この流れでなぜそうなる」

クリスが呆れた顔をする。

「いえ、火精靈から主への感謝の念が伝わってきたので、この際どうかなど。折角魔力もあることですし。あと私、火精靈とは相性いいので」

「まあ確かに、戦力はあつて困るものでもないしな」

クリスはこれまでの経験から、たまに物騒な考え方をしてしまうことがある。

「けど、容量は剣の分だけで足りるのか？」

「主は私とその少ない魔力で契約してるんですよ？得意のインチキ魔法を使えば十分足ります」

「インチキ言うなし。節約は大事なんだ」

「そういうことは、お師匠さまに値段も言えないような物を貢のをやめてから言いましょうね」

クリスの師匠は古代魔法や遺跡の研究をしているので、クリスはよく遺跡の発掘品や古代魔法の本を師匠のところに持つて行っている。

珍しいものなのでかなり高いのだが、師匠は名門貴族の出なのでお金の感覚が鈍く、結構気にせず嬉しそうに貰っている。

クリスは師匠が嬉しそうに受け取ってくれるのが嬉しくて、結果その出費が続くのである。

おかげで最近は、フウリがクリスの財布を握れるほどに、物価に詳しくなってきている。

「よ、よし。森の精靈さまもえ良ければ、契約しましょー・そうしまじょー!」

焦ったようにクリスが言つ。

「けいやくあのおいしこまりょくもらえる?」

首をかしげる火精靈。

「ええ、ええ、それはもう! ただし契約魔法をいじりたいのですが、ようじですか?」

勢い込んで火精靈に向かうクリス。

「けいやくいじる?」

フウリを見つめる火精靈。

「大丈夫です、私も主とそれで契約しますので。あなたに害を成すものではありませんよ」

フウリがやさしく諭す。

「けいやく する」

火精靈がフウリの言葉を聞いてクリスを見る。

「それでは失礼しまして」

クリスは手ごろな棒が無かつたので、魔剣の鞘に魔力をこめて洞窟の床に魔法文字を書いていく。

鞘が通つた床はほんのり光っている。

普通の精靈との契約なら、人間が魔力を提示し、精靈が了承ならそれを取り込むだけの原子的な魔法なのだが、節約魔法を契約に組み込むには、クリス考案、師匠監修の魔法文字の上でそれをやる必要がある。

無事書き終わったクリスは、その上に立つ。

「それでは、契約をしますね。その文字の上に立つてもう以外は普通の契約方法ですので」

精靈は、生物との契約方法を生まれたときから自然と知っている。

「わかった」

火精靈が文字の上に立つと、クリスは魔剣から魔力を吸いだし、それを火精靈の前に持っていく。

火精靈がその魔力の塊を抱くと、段々と塊は消えていく。

やがて魔力の塊が完全に消滅し、火精靈と魔法使いとの間に契約が成立した。

第十四話「魔法使いの娘」

「ふう、無事契約出来たな」

人生一回目の契約が終わつたことにほうとするクリス。

「私のときよりスマーズでしたね」

見守つていたフウリが口を開く。

「けいやく できた」

火精靈はほとんど表情が読み取れないが、若干うれしそうにも見える。

「よくできましたね。ずっと子供がほしーと思つてたんですね」

「おー、なんでそつなる」

フウリの予想外な言葉に反応するクリス。

「戦力なんてこれ以上いると思つてるんですか主。私と主で魔王にも喧嘩売れますよ、そして完勝します」

「物騒なこと言つなー。つていうかどうこひりとなの一・?」

「いえ、ですから子供が欲しかったのです。私と主の子ですよ。名前はどうしますか?」

「なまえ？」

火精靈が首をかしげる。

「ええ、あなたの名前ですよ。持つてないよつので、今から考えましょう」

「おかしい。知らない間に子供ができた」

「現実を見てください。私に似て美人になりますよ」

「種族的に俺には絶対似ないよね！？」

精靈は女神が作ったとされ、格が上ると全ての精靈は女性の形をしている。

「自分の子供が嫁に似ているからといって嫉妬ですか、可哀想な主」

「落ち着けや！まず俺の子供じゃないのに嫁もまだいない！！」

「主が落ち着いてください。これからいつも一緒に主と私との子、並んだらどう見えますか？」

「え・・・あれ・・・ちょっと若い親と子？」

少し想像して、結果を口にするクリス。

「正解です。主がどう思おうと、世間の目が眞実を照らします」

「え、けど、あれ？え、え？」

クリスがしきりに首をかしげる。

「私がお母さんで、あっちで首をかしげている少し間抜けな顔をした人間がお父さんですよ、わかりましたか？」

クリスを放つて刷り込みを開始するフウリ。

「おかあさん おとうさん」

フウリとクリスを交互に見て囁さむ火精靈。

「セヒ、名前はどうしましようか？ 主なに提案はありますか？」

「え、あ、うん。名前だよね、名前。どうしようか？」

思考を放棄したクリス。

「主はネーミングセンスがあまりないですからね。風の精靈だから、シルフと言出したときには契約を引きむきうつかと思いました」

私はあいつが嫌いなんですよ、と続けるフウリ。

「結局、フウリも自分で考えたからなー火精靈に考えてもらひうか？」

「馬鹿なこと言わないでください、この子は人間の言語をさつき伝えたのですよ」

「すんません・・・」

「仕方ない主ですね。私が考えます、大事な子供ですからね」

なんだかんだとフウリは嬉しそうに考えだす。

「あのそれなんだけばやつぱ・・・」

クリスが子供発言に対しして疑問を呈そつとする。

「「ひぬせこ主」ですね、少し考えるので黙つて」この子を見ててください

い

フウリが一刀の元に疑問を切り伏せて、火精靈をクリスの前に押す。

「おどりつせん？」

火精靈がクリスを見上げて首をかしげながら言つ。

「な、なんだこの気持ちは・・・！幼女に見上げられても父さんと呼ばれただけなのに、このときめきは・・・も、もう一回言つてくれるかな？」

火精靈に向かつてお願いするクリス。

「おどりつせん？」

火精靈は再度同じ行動を取る。

「よし。俺が君のお父さんだよー何か欲しいものがあればすぐに言うんだーお父さん何でも買って上げちゃうよー」

クリスは、父性が湧き上がり、それまでの疑問を彼方へと吹き飛ばす。

「ほしいもの？」

「うんうん、何かあるかい！」

「ん おとうさん の まりょく おいしかった」

少し考えて、火精靈が言つ。

「よし、魔剣の魔力を上げよう。しかし、契約で減ったしドラゴン狩りに行くか」

クリスの思考が火精靈を中心に回りだす。

「ドラゴンなら帝国のあの山にまだ養殖場が残つてたっけか。しかし、マークされてるとなるとそこまで行くのは面倒だなあ。そもそもあいつらが・・・」

ぶつぶつと、娘への贈り物のために思案する父親。

ちなみに、帝国の主戦力といつてもいいのがドラゴン騎兵である。

グルーモスとオーカスの国境戦争で、グルーモスに帝国がドラゴンを貸し出した事によりオーカスの被害が増大し、オーカスはギルドに依頼しそのドラゴンを討伐する。

次に、下位とはいえ人に飼われる同種を恥じと思っていた高位のドラゴンに交渉を持ちかけ、竜人の取り成しもあって、オーカスはそ

の助力を得て、新しいギルドのドラゴンキラーに帝国のドラゴン養殖場を襲撃する依頼を出す。

帝国の養殖場のいくつかが壊滅したが、ドラゴンに襲われたインパクトで、ギルドのドラゴンキラーは目立たず仕事ができ、帝国も疑わしいとしてマークだけはしているものの、手配書などは出回っていない。

「主、やっと父親としての自覚が芽生えたようで嬉しいです、あと三人は欲しいですね」

名前を考えていたフウリがクリスの方を向く。

「とりあえず魔剣の魔力を入れても、人型になつてる精霊を維持するのはつらいので一人でいいです」

「甲斐性なしですね主。世界征服できるくらい子供がほしいとか言えないのですか?」

「どんなだけ甲斐性あるんだよお前の俺はー」

「ふむ、良く考えたら、すでに世界征服できますね。よかったですね、主。私の中の主は等身大ですよ?」

フウリは少し考えて頷く。

「よくないだろがーー!物騒すぎるわー!世界征服なんてしないからなー!」

クリスが叫ぶ。

「ふむ。ところで名前なんですが、いいのを思いついたので、それにしたいのですがいいですか？」

フウリは頷くと、話題を変える。

「せうつと流された・・・名前はふつ飛んだのじゃなれや、フウリの好きでいいよ！」

「分かりました。それでは、今日からあなたの名前は「フイリス」です」

フウリは火精靈の前にしゃがむと田線を合わせる。

「わたしのなまえふいりす？」

火精靈はたどたどしく聞き返す。

「はい、そうです、フイリス。私たちの可愛い娘です」

フウリは愛おしそうに火精靈の名前を口にする。

「うん わかった ふいりす」

フイリスはうなずいて、口の中で自分の名前を囁呑する。

「ちなみにどんな意味があるんだ？」

安全第一を唱えていたクリスがフウリに聞く。

「さすが主、いい」とを聞いてくれました、花丸をあげますよ。」「**フイ**」は古代の言葉で「照らすもの」という意味があり、「リスト」は主の名前から頂きました

嬉しそうにフウリが説明する。

「おお！俺の名前使ってくれるなんて感動した！」

「はい。見た目は似つかっても主には似ないので、せめて名前だけでもと思ってまして」

「感動を返してくれ！」

「うん、うねやくしない」

フイリスは「くつと頷く。

「よしよし、えらいですねー」

フウリがフイリスの頭を撫でる。

「おかしい、何かがおかしいんだが！」

「はいはい、主。今日は宴もあるんでしょう、結構時間使いましたから、そろそろ戻りましょう。フイリスもお披露目しないといけませんね」

「くっ。俺も何か父親らしことをしなこといけない気がする…よ
し、手を繋ぐぞフイリス！」

「て つなぐ ？」

「そりゃ、お手を拝借してつと

フイリスの左手を取るクリス。

「て あつたかい」

繫がれた手を見てフイリスが呟く。

「それじゃあ、私とも繫ぎましょうね」

「ん 」

フウリがフイリスの右手を取る。

仲良く手を繫いで森を歩くその姿は、若い夫婦とその子にしか見え
なかつた。

第十五話「魔法使いと精霊の評判」

「よーし、皆の衆、飲み物は行き渡つたかの」

村の広場の中央で、大きな焚き火を囲んで皆が村長の言葉に耳を傾ける。

クリスとフウリ、フィリスは村長と向かつて立つている。

「それでは。森に巣くつていた強大な魔物を倒していただいた精霊さま方に感謝致します。ありがとうございました」

村長に続いて皆が口々に感謝を述べる。

やがて、それが静まると、また村長が話だす。

「そして、その精霊さま方の祝福を運んでくれたクリスにも感謝を

！」

こちらは罵声混じりの感謝が飛び。

「それでは、精霊さまと森の恵みに感謝し、乾杯！」

村長の音頭で皆がコップを掲げ、中身をあおる。

そこにはかしこでおいしそうな匂いと共に料理が振舞われる。

そして、精霊一人を見た村人から様々な反応が飛び交う。

フウリを見た村人たちは・・・

「へそー・まじで美人じゃねえか！」

「あの容姿で家庭的・・・！圧倒的じゃないか！」

「おい、なんだあのスタイルは。人間とは思えない」

「精靈さまだらうが！しかしそういな・・・」

「あの容姿で罵倒してくれるのか。天国じゃね？」「

「それがクリスと契約してるだと・・・」

「これは制裁を加えないといけないな、色本の件を含めて」

「我ら、トリエ村独身貴族を敵に回したこと、後悔させてやる」

「着てる服も綺麗よねえ」

「肌も真っ白、すべすべしてそう」

「髪の毛も真っ白で長くて綺麗だわ」

「スタイルも良すぎ。何か秘訣とかあるのかしら」

「私、さつき日が合つたわー・きつと今夜呼ばれるわー」

「それは私を見てたのよーお風呂に入つておかないとー」

「つひいつか、田も綺麗ね。水色できつとじつ」

「お姉さまって呼びたいわ

そして、フィリスを見た村人たちは・・・

「お父さんって呼ばれたい!」

「俺はお兄ちゃんがいいな

「年齢考えり。わしがおじこちゃんなんだな

「あれが・・・天使か・・・」

「おい、精靈さまだつてさつきから言つてるだらうが!しかし天使と言われても違和感がないな」

「あの子もクリスと契約してんんだろ・・・べそ!俺も魔法使いになる!」

「お前一十五だろ?あと五年辛抱しろ。しかし、これはトリエ村お兄ちゃんと呼ばれ隊が制裁行動に移らないといけなくなるな」

「クリスお前はいい奴だったよ、しかしお前の精靈がいけない。可愛すぎむ」

「なにあの子！お人形さんみたい！」

「髪の毛真っ赤でふわふわしてるわ、顔を埋めたい」

「肌も白くて、もちもちしてねー。」

「目も真ん丸よ。可愛いわあ！」

「…ちをじいつ見てたわ。私の…とが気になるのかしら？」

「後ろの焚き火を見てたのよ。火の精靈なんて、どんな怖いものか
と思つたらあんな可愛いなんて、お持ち帰りしたいわ」

「服も似合つてゐるわねえ、どこか貴族のお嬢様みたい」

「貴族さまなんて見たこと無いけどね。
精靈さまのほうが百倍可愛
いと思うわ！」

等々、ヨーロッパ・アシックスへ。

しかし、当の本人たちは我冠せずと料理を食べている。

フイリスはクリスの膝の上で、出された料理を口一杯に頬張つてい
る。

左隣では、フウリがクリスに酒を注いでる。

右隣では、リリイがクリスを質問責めにしている。

「結局、五年も何してたの？」

リリイは噂でクリスの話を聞いたのだが、木の棒を振りまして年下の子供たちと遊んでいたクリスが印象的で、どうにも現実感が沸かず、同じ質問を何回か繰り返していた。

「おうじで、まほうの、おべんきょうを、してたんだよ、ふつじも、そなときこ、けいやくしたんだ」

そんなリリイにクリスがゆづくつと答える。

「な、なんでそんな喋り方なのーー？」

「なんじで、それはもううんこリイにも理解ができるよ！」だよ
？」

そもそも当然のようにクリスが言つ。

「普通の喋り方でも理解できるよーー？」

「じゃあ、何度も同じ質問をするな

呆れたようにクリスは言つ。

「だ、だつて！あのクリス君だよーー？村で一番訳の分からぬ行動をしてたクリス君だよーー？それが、それが！うがーー！」

何かに耐えがたかったかのよつて叫ぶリリイ。

「お前のほうが訳分からんぞ？」

「にんげんの むすめ つるわくしちゃ だめよ ？」

クリスのツッパリに続いて、膝の上からフイリスのお叱りが入る。

「いい子ですね、フイリス。言われたことをちゃんと守れて、他人にも注意できるなんて。こっちのサラダもおいしくですよ」

フウリがフイリスを褒めつつ、サラダをつきわける。

「ね、ねえ、クリス君。フイリスちゃんつていくつなのかな?なんか娘つて呼ばれると違和感が・・・」

リリイはそんな二人を暫く見つめてクリスに尋ねる。

「ん?精霊に時間の感覚は無いらしいからなあ。年なんて数えないだろ。まあここまで格が高いと、千年は生きてるんじゃないかな?」

クリスは、膝の上のフイリスがこぼしたサラダをつまみながら答える。

「せ、千年ー?じゃ、じゃあフウリちゃんはー?」

驚愕の眼差しでクリスに質問するリリイ。

「ああ。じこつは・・・」

クリスが話そうとしたことじゆでストップがかかる。

「主はいつから女性の年齢をペーリペーリしゃべるようになったんですか？」

すさまじいフレッシュヤーと共にクリスに言い放つフウリ。

「すみませんでした、フウリさま。フウリさまはいつまでもお若く、美しい存在であります。それ以外のことは存在いたしません。精霊の一の美女であると不肖この私、クリスは確信しております。まさに天使もかくやとこう清廉さでござります！」

クリスは一瞬固まる、即座にフウリに謝る。

「ふむ。そんなこと言わると照れますね。主、杯が空いてるじゃないですか。ビワや一杯」

クリスの言葉を聞くと、嬉しそうに酌をするフウリ。

「お、ありがとうございます。しかしフウリも大人間らしこと云ひようになつたよな」

注がれたお酒を飲みつつクリスはしみじみ云つ。

「主が人間の中では浮いていたので、せめて私ぐらには仲良くなつてはと思いまして、勉強したんですよ」

フウリがフィリスの口を拭きながら云つ。

「クリス君のことを大事に思つてるんだねえ。っていうか、クリス君はやっぱ王都でも浮いてたの？」

いつもならクリスが叫ぶところだが、リリイが即座に反応したため口を挟めなくなる。

「ええ、それはもう。主ときたら魔法使いの卵なのに、剣がつよすぎて、剣の弟子までいたんですよ」

「剣の弟子・・・クリス君の弟子っていづれとは、やっぱ突き抜けた？」

「いや、それが礼儀正しい子でしたね。今は騎士になつていのはずです」

「あはは、騎士を剣の弟子にする魔法使ひってどうなのよ」

「主ぐらいなものでしょひねえ。あとせ他こも・・・」

・・・・・

口を挟む隙が無くなり、言われるがままにして、一度夜空を見上げ、結局膝の上の娘の世話に専念する魔法使いであった。

番外一 「魔法使いと魔兵团」（繪書モ）

感想欄見て、序盤でめちゃつだなあと思ったのを、動画見つつ書いてたりでねたので置いておきます。めちゃくちゃいよいよめっちゃ。

番外一 「魔法使いと魔兵団」

その日、クリスは魔法学院の寮の部屋で目が覚める。

昨日やつと地獄の追試験が終わり、部屋に戻ったクリスは夕方に寝てしまつたので、まだ早朝だといつて一度寝をする素振りを見せない。

隣に寝てるフウツをおひれなつよつて起きあとひするクリス。

「おはよひ、フウリ。こいつも思つんだけどフウリは寝てるの？あと王都を壊滅に追い込むつもりですね、さすが主です」

クリスが起き上がる前にベッドから起き上がつたフウリがクリスに向かつて挨拶する。

「おはよひ、フウリ。こいつも思つんだけどフウリは寝てるの？あとそんな大規模魔法、俺の寝起きで使えたら不便しないんだけどね」

クリスはこつも自分が起きる直前に起き上がるフウリに疑問を投げかける。

「私は出来た精霊なので主より遅くねて主より早く起きてるんですよ。あと、主がご希望でしたら、槍ではなく刃なら無数に降らすことができますが、どうしますか？主が早く起きたら王都全体に、主が遅く起きたら主の上でいいですか？」

フウリが首をかしげたずねる。

「お、いいい！俺の寝起きにせばこもの付属させないでええ…ビッちにしろ俺死ぬじゃんそれ！」

クリスが絶叫する。

「ふむ、いい案だと思ったんですが。まあ折角早く起きたのですし、朝食を取つてギルドのほうへ行きませんか？」

「お、いいね。久々に依頼を受けに行こうか…やつと長期休暇だし」

元気に腕を振り回してクリスが言へ。

「やつですね、主は皆に遅れて休暇ですからね」

「はい、すみません。テスト勉強教えてもらつて助かりました」

「それでは朝食を取つたら行きましょつか。市場なら何か食べるものもあるでしょつか」

「へーい」

支度をして二人は連れ立つて市場に向かつた。

「クリイイイイス！待つてたぞ！」

「あ、やべ。師匠に用事があつたんだ」

ギルドを入つた瞬間に首に腕を回してくる竜人に、確実に厄介事が待つてゐると思つたクリスは、ありもしない用事を思いだす。

「おじおじおいー」のベアードさまが直々に指名してやるんだ、有難くついて来いー！」

「おじまで、おっさん。指名つてなんだ、おい引きずるな、待つてー！本当にちよつとまつてーた、助けてー！攫われるううー！」

クリスがギルド職員に手を伸ばして、恥も外聞もなく助けを求めるも、職員は手を合わせて祈るだけだった。

そして、馬車に詰め込まれるクリス。

馬車の中には精銳の傭兵团が待ち構えていた。

「よつし、ほら最後の一入だ。もう少し遅くなると思つたんだがな。ここつめ、ちゃんと早くにきやがつた。さすが俺の一番弟子だな」

「お、クリスか。おせーべ。団長待たせるなんて、いい身分になつたもんだな！」

「つたぐ、お前は」のギバル傭兵团員としての心構えがなつてないな

「帰つたら一から叩きなおすか」

好き勝手に言う馬車の住人たち。

ギバル傭兵团員は全員が竜人という恐ろしく精強な傭兵团だ。

団長のベアードはその体躯に見合つた豪腕の持ち主で、身の丈以上の大剣を自由自在に振り回す。

クリスは何度かギルドの依頼でこの傭兵团と組んでいて、何故かベアードや団員たちの覚えがよく、指名で依頼を受けることが多い。

「おい、おっさん！俺は傭兵团と仕事なんて一切入れてないはずなんだけど…っていうか弟子でもなければ傭兵になつた覚えもねえ！あんたら本当に好き勝手だな！」

やつと自由になつた体を振り回してクリスは叫ぶ。

「おお？フウリの嬢ちゃんに言つたはずなんだけどな」

「ええ、確かに聞きました。なので朝からギルドに誘導したのですよ主。ちなみに私が夕飯を買って帰るときにベアードから依頼を聞いたのですが、帰つたら主は寝ていたので折角ですので、長期休暇初日のサプライズイベントにしてみました」

姿を消していたフウリがすつと出てきて言つ。

「おー、そういうわけだから行くぞ！」

クリスが口をパクパクしてゐ間に馬車が走りだす。

「まあそんな訳で依頼は簡単だ。国境にドーランが出た、お国のドーランキラーの騎士さま方は体調が悪いのかドーランを倒せない、だから俺たちが倒す」

馬車の中でクリスに説明するベアード。

「体調がわるいなら仕方ねえな」

「おひ、戦場の水が合わなかつたんだろ」

「温熱療法もが

「騎士団なんて名前だけじゃねえか」

騒ぐ団員。

「つぬせえぞー。つせ帝国の生ぬるこドーランもせんだり。」
「ち
は派手に稼がせてもらひて万々歳じやねえかー」

そうこうでクリスに向を直るベアード。

「ところわけだから。そろそろドーランキラーの一いつでも真っ白い
うめ、クリス！」

クリスの肩に手を置き、楽しそうに話すベアード。

「うわーわー！ 脳筋にもヨビがあるだろー。ドーランだよー。ベア

つても魔物の王者だよ！？あんたら蜥蜴とは違うんだよ！？あこつら羽もはえてるしでけえし！」

ベアードの手を振りほどき身振り手ぶりで喰くクリス。

「蜥蜴だと！？いい度胸だクリス！俺らと、あの羽がついた蜥蜴どもの違いを見せてやるぜえ？なあおい！」

ベアードは団員に向き直り同意を求める。

「おう！あんな、ちよっと火が吐けるからって調子のいい蜥蜴は、切り刻んでやるよー！」

「飛んで逃げねえよー、しつかり羽も切り落としてなーー！」

笑い声が馬車を支配し、進んでいく。

「だめだ、この脳筋ども・・・どつこもできねえ！」

クリスは隅で頭を抱えるのだった。

結局それから馬車で数日で、国境の戦場前に arrivé。

ベアードは軍のお偉いさんのといへ顔を出しに行き、配置が教えられる。

「軍のやつらは、敵の増援をドラゴンどもと合流する前に叩く。俺らの役割はドラゴンの排除だ。戦場に出てきた温室育ちの蜥蜴ども

を食ひにつけずかでー。」

「「「「うおおおおおおおーー。」」」

「くそつ、脳筋がーー。」

皆が氣炎を上げ移動を開始する。

そして国境の前線につくと、数体のドラゴンが舞つてこるのが見えてくる。

「おこおこ、やつぱでかいって。俺丸呑みされやつてー。」

クリスがドラゴンを見て及び腰になる。

「おこおこクリス、ここまで来てなんて様だよー。」

団員がクリスをちゃかす。

「黙れ脳筋どもーー俺は強制参加だぞーー。」

その様子を見ていたベアードが号令を掛ける。

「よし、お前らーあつちまドラゴンさこるがまだ騎兵は乗つてねえ。帝国も騎兵の貸し出しまではしてねえみてえだな。連戦で護衛の数も少ねえ。フウコの嬢ちゃんが、風での蜥蜴どもを叩き落していく

れる。奇襲を掛けた瞬間に呑んで……。」

そつぱんとベアードたちは恐ろしげに速さで戦場を駆けていく。

クリスもフウリに魔法を掛けてもうごベアードに追いつく。

「クリスは俺について来い！」

ベアードは並走するクリスを一瞥して叫ぶ。

「へーへー。お供しますよおつかさん！」

ぐるぐるスピードを上げる一団。

途中で帝国の警備が気づくも、時既に遅し。

叩き落とされたグラゴンに向かって剣を振り上げる一団。

護衛が必死に防ごうとするも、それを食いちぎる勢いで攻撃を仕掛ける傭兵たち。

と、そこまでグラゴンが一歩だけ走って逃げる。

「おこおこ、グラゴンってあんな早く地べた走るんだなあ！」

クリスが護衛と切りあいつ、走るグラゴンを眺めて口を開く。

「暢気にしてねえで、あれ切つてこー！」

ベアードが走るグラゴンを引ひしゃべつて叫ぶ。

「くわつー・俺は団圓じゅやねえぞつヒー。」

クリスは叫びながら護衛を切り倒し、走るデラゴンに向かって行く。

「フウリー・足止めできなーー!ー?」

走りながら聞くクリス。

「あつこですね、デラゴンが飛べないよ!上空の魔力を出してますので」

「ア解。んじゃ急ぐかね!」

魔力を使い一気に加速するクリス。

やがてデラゴンに追いつくと、勢によく刃を切りつけた。

「ぐおおおおお」

デラゴンが雄叫びを上げて倒れる。

そこで、前方にグルーモスの軍隊がこちらに向かってきているのが見える。

「おーおー、冗談じゃねえぞー・つちの国の軍は足止めもできないのかああ」

「主、デラゴンはどれも飛べる状態ではないよ!なので、上空の魔法を解いて、あいつを私が足止めしますのでデラゴンを頼みます」

言つが早いか、軍隊のまゝへ飛びフウリ。

クリスはドラゴンに立ち向かう。

「！」の！蜥蜴が！倒れろやああああ

ドラゴンは尻尾を振り回し攻撃するが、クリスはそれを巧みに避けて切りつけていく。

「硬すぎるだろ！――」

クリスの剣は鱗に阻まれ、かすり傷しかつけれない。

「！」のおおおお！

クリスが渾身の力で魔剣を振りうと、さあまで鱗に阻まれ致命傷を与えられなかつた剣が尻尾を両断する。

これはいけると思つたクリスは、頭をかち割りうと剣を振り上げ飛び上がり、力いっぱい振り下ろす。

すると、頭どころか胴体まで真つ一つになつて、ついでに魔剣の斬撃が敵の増援の手前まで地面を抉る。

一瞬戦場が静寂に包まる。

次の瞬間には、敵の増援は壊走していくのだった。

遅れてきたオーカスの軍に後始末を任せて引き上げる傭兵团。

軍の陣地近くに陣取り、宴会を始める。

「我が弟子、クリスのドラゴンキラー獲得を祝つて、乾杯！…」

「…乾杯！…」

団員たちが密かに持ち帰ったドラゴンの肉が焼かれる中、一人いじけているクリス。

「くそっ、脳筋どもにはめられた拳句、魔法使いがドラゴンキラートか、また学院で浮いちまう！…」

「主、もう手遅れですので、お肉を食べましょ。おいしいですよ、主が一刀両断にしたドラゴンの肉。あそこまで綺麗に切っていたのは無かつたので、皆あれから肉を剥いでましたから」

「うおおおおおおお！やけ食いじゃああああー肉持つて来い肉ううう！」

「おおー！クリスが復活したぞ！」

「おら、酒も飲め！」

「おいその肉まだ焼けてねえぞ、いつち食えー！」

「つたぐ、野菜も食えよ」

「祝い」「アリバハ」の鱗、何枚か持つてきてやつたから

「あ、俺ももつてきただわ」

「俺心臓剥いできたぞ」

「養殖物の心臓はどうもなあ」

「肉は結構うまーのにな」

「つていうが、団長なんてクリスのために田玉くり抜いてたぜ」

「つくれ。俺爪な」

鍊金の材料になりそうなものをクリスの前にひんでいて団員たち。

その口は遅くまで宴会が続き、翌朝に王都へと戻る傭兵団。

「へへ、おっちゃんの依頼は金輪際つけねえしーー！」

爪やら鱗やらがはみ出でる大きな袋を抱えて膨れつ面のクリス。

「おこおこ、やつぱつなよ。今回も生を残つたじゃねえか

しみじみとベードが言つ。

「おかしいだろ？！学生が町で拉致されて気づいたら生き死に掛けて戦場駆けずり回つてドラゴン退治とか普通ないよ！」

「がっはっは。いい経験できただろ！…また行こうな！」

「そのペクニッケにでも誘ひよつた軽いノリをやめのめめめめめめめめ

馬車の中で魔法使いの魂の叫びがこだました。

番外一 「魔法使いと傭兵団」（後書き）

最終結果

複数書かれてた方のは、一番上のを集計しました。

ドラゴン	3票
師匠	3票
フウリ	2票
リリイ	1票
王様	1票
木の棒	1票
闇討ち	1票
トライン姫	1票
貴族	1票
父	1票
弟子	1票

でした。

明日は師匠を。

番外一「魔法使いの相棒」（前書き）

仕込んでおいたのさ！

アクセス解析なるものを見たらお昼時にアクセスが跳ね上がるようなので、書き貯めていたやつを予約投稿してみました。やつぱり昼休みに携帯で読みますよね！

少しでも楽しんでいただければ嬉しいですが、この話は二つも通りが違うので注意してください。

番外一「魔法使いの相棒」

遥か昔、世界は魔法技術の発達により栄華を極めていた。

ある大陸で、人々は戦争を繰り返し、やがて大きな一つの国家となつた。

しかし彼らは、それだけでは満たされなかつた。

別大陸に侵攻するための、更に強大な力を求めた。

そしてその結果、世界を揺るがす出来事が起つた。

彼らは力を求めるあまり、魔界との間に扉を作り、それを開いたのである。

出てきた悪魔たちは、力に目の眩んだ人間を狡猾に騙し、世界での自由を手に入れ、人々を攻撃した。

悪魔は魔力食いを作り、大陸のあらゆる生物の魔力をを集め、その力で魔物を創造した。

悪魔と魔物によつて大陸は滅ぼされた。

そして、悪魔と魔物は別大陸に侵攻した。

別大陸では、悪魔召喚の地から逃げ延びてきた人々によつてその地で起きたことが伝えられ、対策が練られた。

天界への門を開き、天使を呼び出したのである。

天使は人々の願いを聞きいれ、力を貸した。

天使は精靈を創造し、魔物に対抗した。

天使と魔物、精靈と魔物の力は拮抗した。

しかし、魔物の中の知性の高い種族が、魔物を裏切った事により拮抗は破られた。

とうとう、天使と精靈は魔物と魔物を退けたのである。

しかし、まだ魔物召喚の地には魔界との扉が存在していた。

魔物との戦いで疲弊した天使には、扉を破壊するだけの力が残つていなかつた。

人間、精靈も同様にほとんど力が残つていなかつた。

その状況を開拓するために、人間は魔界の扉の技術を応用し、別の世界から力を持つた人間を召喚する扉を創り上げた。

そして扉は開いた。

扉のある神殿の中央には、奇抜な格好をした人間の女が立つていた。

短い腰巻の割に、上はしつかりとした出来の服を着、髪と目が真っ黒な特徴的な女だつた。

女は最初、混乱した様子で喚き散らした。

しかし、人間の王自らの説得と説明によつて状況を理解すると、元の世界に自分を返すことを条件に扉を破壊することを承諾する。

女のために入間の王は、天使から与えられた知識と、それまでの魔法技術を融合させ、聖剣を作り渡した。

女は、恐ろしいほどの魔力を有し、四大精靈と契約し、聖剣と共に悪魔召喚の地へと旅立った。

かの地で女は、密かに生き残つた人間たちや、知性のある魔物、また不思議な術を使う男の力を借り、とうとう城の中にある魔界の扉の前まで辿り着いた。

そこには、初めて世界に渡つた悪魔、魔王がいた。

魔王と女の戦いは苛烈を極めた。

精靈たちの力もつきかけ、女もまた魔力も体力も使い果たそうとしていた。

女はこのままでは勝て無いことを悟り、最後の賭けにでた。

自分で掛けて聖剣を振り下ろたのである。

女は王から聖剣を渡されたとき、聖剣は切つたモノの力を得ることができる、と聞いていた。

自分がこの世界を救うことができる力があるのなら、聖剣にそれを

吸わせれば魔王を倒せると考えたのである。

そして聖剣は女に突き刺さり、光を放ち女を飲み込んだ。

女の意図を正確に読み取った風の精靈は、透かさず風を操り聖剣を魔王に突き立てた。

魔王は女の前に敗れ去つた。

残つた門を、精靈たちは自らの身で塞いだ。

風の精靈だけは、このことを伝えるために聖剣と共に、女を召喚した大陸へと戻つた。

そして、風の精靈は事のあらましを伝えると、女の魂までも食らつた聖剣を王に預け、彼方へと飛び去つて行つた。

王は女の死を悲しみ、聖剣、魔界の扉、天界の扉、異世界の扉に関する全ての知識を封印し、この悲劇が一度と起こらないようにした。

女は勇者と呼ばれ、その偉業は長く語り継がれることになる。

聖剣は、長く渡り力を封印された状態で、代々の王に受け継がれていたが、やがて歴史の闇へと消えていった。

そうして、あるときは屋敷に飾られ、あるときは魔物を切り、あるときは人を切つた聖剣は、ボロボロになつて武器屋の樽に入れられていた。

その聖剣を一人の男が掴みあげた。

男は嬉しそうに店主にお金を払つと、聖剣を貴族の屋敷へと持つていった。

その後、男はボロボロだつた聖剣を綺麗にし、いつも腰にさげるようになつた。

そして聖剣はまた様々なものを切つた。

ゴブリンやオーク、ドラゴンや亡靈、長い時を経て生き残つていた悪魔も切つた。

聖剣に意思はない、しかし女の魂だけはずつと残つていた。

ただ、絶望の中に希望を見出した人々を守りたかつた勇者の魂だけが。

その魂が、今の聖剣の主にかすかに反応するのだった。

「ん?なんか魔剣から聞いた気がする」

「何を言つてるんですか、主。魔剣はあくまで魔剣です、しゃべるわけ無いでしょ?いくら友人が少なく寂しいからと言つて、魔剣にまで期待するのはどうかと思います。頑張つてもしゃべりだしませんよ?私との会話で我慢してください」

「と、友達くらごるよー?まあフウリとの会話は樂しいナビ。そうじゃなくてだな、なんかこう語りかけてくるような、そういうのうな」

「主、何度も言いますが、それは幻覚、幻聴、幻です。気のせいです。もし本当だとしても、それは呪いというものではありませんか?だとしたらあまり寄らないでくださいね、こいつひつひつそうです。あと、私も主との会話は好きですよ」

「の、呪いなんてあるのか!?師匠に見てもらいに行こーーあと、会話はもう少しお手柔らかにお願いします」

「ふむ、お師匠さまなら何か分かるかもしれませんね。まあ十中八九、主の寂しさからくる病だとおもいますが。おっと、柔らかくでしたね。主、可哀想に、頭を患つてしまつて・・・大丈夫、私がついてますからね。いやとなれば主の頭の中身を一回綺麗にしますので」

「やせしこど、根本的に間違つてるーそしてさうつと怖いこと言うなーあとその慈愛に満ちた視線やめてー」

「わがままな主ですね、とりあえず師匠の家に行きますよ」

「はー・・・

とびとびと歩きだす今の主の腰で、聖剣がかすかに震えるのだった。

番外一「魔法使いの相棒」（後書き）

とこうことで、これが真ヒロインセー！永遠に未実装ですが。ツンギレ系ヒロインです、ツンツン突いて、ぱっさりキれます。本編でも出所不明で変な力を持つてるミステリアスウェポンであり、お役立ちアイテム兼主人公の主な攻撃手段として活躍してるので、あまりの人気のなさに咽び泣いて、書き貯めてたやつから引っ張り出しました。

番外三「魔法使いの歸匠」（前書き）

アンケートで「アーティスト」と並んで書かれた匠の話です。

番外三「魔法使いの師匠」

日も暮れてきて、オーカス魔法学院の教師にして古代魔法の使い手、遺跡のスペシャリストであるフーンリー・アスクルクは、王都近郊の遺跡の調査をして家に帰る途中だった。

彼女の家は、代々宫廷魔法院に勤める貴族の家柄で、実際彼女の父や兄も勤めている。

しかし、彼女は遺跡をこよなく愛し、両親の持つてくる縁談の話をことじとく断つて、学院で教師をしつつ、遺跡や古代魔法の研究をする毎日を送っている。

本当にたまにある、断れないお見合いには行くのだが、相手が彼女の姿を見て戸惑うことが多い。

いき遅れのおばさんとの見合いかと思つたら、百四十センチに届かない身長、メガネが似合つ少女がそこにいるのだから、当然の反応である。

見た目は若い、というよりも幼いと表現できるほどなので、見合いで気に入られて結婚なんて話もありそうなのだが、如何せんフーンリーは見合いの場にありがちな趣味の話題への食いつきが半端ないので、相手を遺跡愛でノックアウトしてしまい、結果見合いの戦績に白星がつく事はない。

フーンリーにしてみれば、実家が断り切れない見合いだから受けるだけで、向こうから断つてくれるなら大助かりというふうにしか思っていないのだが、親はいい加減結婚してほしいと思っている。

「ふう、少し遅くなつてしまつました。まさか空に浮かぶ島の記述
があるなんて・・・」

ぶつぶつと今日の成果を独り言でまとめていくフーンリー。

前も見ずに歩いていて、何かを踏みつけた。

「ぐえ」

フーンリーの足元から聞こえる奇声。

「ぐえ？」

フーンリーは首をかしげて足を上げると、そこには木の棒を持った少年が倒れていた。

「えーー? い、行き倒れですか! ? 大丈夫ですか! ?」

フーンリーは膝をついて子供を揺らす。

「お、お、お、お、世界が、ゆ、れ、て、る

やがてぐつたりする少年。

「ああああ、大変ですー! じうじたーーー!」

おひおひおひのフーンリーだが、少年のお腹から盛大な虫の声が聞こ

え、落ち着いて自分の体を魔力で強化し、少年を家に運ぶことにす
る。

「ぬぐづ、飯の匂いがするわ」

ゾンビのよがれ、ベッドから這い出でて匂いを嗅ぎながら這い出でる少
年。

「わよ、ちよっと待つてください」

ベッドの脇にいたフロンリーが慌てて止める。

「ぬ、俺に止めを刺した幼女じやないか！」

少年がフロンリーを見て声を上げる。

「幼女じやありませんーあなたよりずっと年上ですよー。」

フロンリーが怒る。

「じやあこへつだよー。」

少年もむきになつて聞く。

「女性に年齢を聞くなど留わなかつたのですか？」

フロンリーが嗜めるよがれを放つ。

「なんという理不尽・・・圧倒的理不尽」

少年は俯いてつぶやく。

フェンリーは、メイドに用意させたご飯を少年に向かえ、落ち着いた
ところで自己紹介と事情を聞いた。

「クリス君は、騎士団に入るために王都まで来たんですね」

思案顔のフェンリー。

「おうともートリエ村騎士団の団長さまだからなー王都の騎士団に
もきつと入れるー！」

自信に満ちた顔でクリスが言つ。

「と、トリエ村から一人で来たんですか！？道中魔物はどうしたん
ですか！？」

驚愕の眼差しをクリスに向けるフェンリー。

実際は王都から周りの村々までしっかりと街道が整備されていて、危
険な魔物は排除されるのだが、繁殖力の高いゴブリンなどは、定期
的に駆除してもすぐに沸いてしまうので、子供一人で歩くには危険
すぎるのだ。

「」の聖剣があれば魔物なんて一発さー！」

そんな驚愕を他所に、木の棒を掲げ聖剣と言つてのけるクリス。

所々魔物の血らしき跡がついていて、フェンリーもクリスを運ぶとき放置しようと思ったのだが、意識の無いクリスが頑なに離さないので仕方なく一緒に持ってきていた。

「ついでに弓もあるし」

「こつちは作りのいい弓なのだが、クリスにとっては聖剣のおまけのようだ。

「いやいや、それだけで子供が一人で街道を・・・ん・・・？」

クリスをじっくり見ていたフェンリーが、おもむろに立ち上がると更に近くで観察する。

「あれ？君魔法使えるんですか？」

微弱な魔力で体を強化しているように見えなくも無いクリスに質問するフェンリー。

「え？魔法？」

フェンリーの言葉に首をかしげるクリス。

それに対して、研究者の魂に火がついたのか激しく質問を繰り返すフェンリー。

結論を言つと、クリスは無意識に魔力による身体の強化を使つているようだった。

普通はありえないことなのだが、クリスが嘘を言つてゐるよつには見えないフェンリーは、珍しく強引に自分を納得させる。

そもそも、そんな微弱な魔力での強化だけで、子供が王都まで魔物を倒して歩いてくるなんて、到底無理なのだ。

クリスに、何か言いようの無い理不尽なものを感じ取つたフェンリーは研究者魂を引っ込める。

しかし、そんな理不尽なものを感じる少年に少しやり返してやりたいと思つたフェンリーは、自分がおもつていてるより強烈な一撃を少年に見舞つた。

「知つてましたか？騎士団つて、貴族の出じやない」といつぱいのことが無い限り入れませんよ？」

実際、平民で入るつとすれば、戦場で目覚しい功績を上げるが、それこそドリゴンを倒せるほどの実力がいる。

天使のような笑顔で言つフェンリーを見て、一瞬目を見開き、次いで果然とフェンリーの顔を見るクリス。

さすがに可哀想になつたフェンリーはフォローをするも、クリスが再起動する様子を見せない。

どうも、クリスにはクリスなりの深い事情があるようだと察したフ

フェンリー。

それから数時間かけて、やっと動き出したクリスに、フェンリーはあることを心に決める。

「クリス君、折角魔力を無意識にでも使っているのです。魔法使いになつてみませんか？私が一からしつかり教えますよ？」

見た目幼女の魔法使いの慈愛に満ちた言葉に、魔法使い未満の少年は、なぜか母を思いだし、泣きながら頷くのであった。

それからとこいつもの、フェンリーの周りはにじめやかになった。

なんせクリスは何をしでかすか分からぬびっくり箱のような弟子である。

いろいろな事件を引き起こし、巻き込まれ、中には死ぬんぢやないかと思うことも多々あつたのに、そのたびにしつかり生きて、フェンリーに何かしらの研究材料を持つてくるのである。

その後始末はフェンリーに回つてくるのだが、なぜかフェンリーはそれを楽しく処理することに気がづいて。

「子供がいるところな感じなのかな」

そう呟き、結婚もいいかもと思つフェンリーだった。

そして、フーンリーに弟子が出来てにぎやかになったところがもう一つある、国の魔法関係機関だ。

そもそも、古代魔法の数少ない使い手でありながら遺跡研究ばかりし、弟子を取らないフーンリー・アスクルクが弟子を取つたのである。

なまじ名門貴族の出であるために、学院も魔法関係者も弟子を取りに喜んだ。

しかし、ござ箱を開けると、その弟子は破天荒すぎた。

あのフーンリー・アスクルクの弟子がよりもよつて冒険者ギルドに出入りする、それだけで関係者は卒倒する光景だ。フーンリーの弟子ならば、ただ肅々と魔法学院に通い、卒業すれば宫廷魔法院にはいれるのだ。それが彼らの弁で言う、「一流二流の集うギルド」など出入りするなんて、ということである。

そして、その弟子は遺跡を崩壊させかけたり、崩壊させたり、傭兵紛いの仕事をしたり、あまつさえドラゴンキラーの称号を国から授与されている。ドラゴンの鱗は非常に抗魔力に優れ、人間の魔法ではまず倒せないのにだ、どうやって倒したかなんてのはそれまでの所業で明確である。

明らかに魔法使いとして間違っている、それが国の魔法関係者の結論であった。

しかしクリスは、高位の精靈と契約しており、フーンリーの弟子でどこのかクリスの指向性を修正できないかと魔法関係者は考えた。

しかしクリスは、高位の精靈と契約しており、フーンリーの弟子で

もある、そしてなぜかクリス自身変な人脈を形成しておつ、手出しができない爆弾と化していた。

もつ卒業を待つて取り込むしか無い、魔法関係者はそつ結論付けた。

そんな爆弾が今田も剣を下げて王都を闖歩する。

「歸匠ー・めずらじこ本もつてきたよー。」

「あらー・ありがとうござります、クリス君。けど、いつも思ひのですが貰つていいのですか?」

「なんて言いつつ既に手が伸びている件」

「えへへ。おおー・これは面白やつな本ですねーー・ビリで手に入れたのですか!ー?」

「連休中に遠出して、そここの行商人から買つたんだ。そのあと聖王國まで行つてたから少し遅くなつたけど。安かつたから気にしないでいいよー。」

「おおー・ありがとうござります!早速読ませていただきたいといふなんですが・・・聖王國ですか・・・」

「おうと、これからフウコヒターーだつたんだ」

「あの風精靈わざと仲良くやつてこるのは良い事ですが、逃げない

でくださいね。聖王國といえば、最近、姫さまに無礼を働いた賊の手配書が回ってるようなのですが、人相書きはありませんでしたが、特徴がクリス君に似ていましてね、身に覚えありませんか？」

「無礼なんて働いてないし！！ただちょっと羽・・・ハッ！」

「ほつ？ただちょっと？なんですか？」

「くつ、あばよ師匠！」

「待ちなさいーい！！

王都にじゅれあう師弟の声が響くのだった。

第一章 ハピローケ

宴が終わり数日がたつた。

その数日の間に、クリスの周りではいろいろあった。

宴の後、クリスがフイリスを連れて家に戻つたことド一騒動あつた。

「お義母さま、この子は主と私の子供でフイリスと言います。わあ、
フイリス、お婆ちゃんに挨拶しなさい」

フウリがフイリスを促す。

「おばあちゃん？」

フイリスがマリアンを見、フウリに向き直つて聞き返す。

「ナヘですよ、お父さんのお母さんなんです」

フウリがやせじへ教える。

「おばあちゃん ようじへ おねがいします」

ペコつとお辞儀付きで挨拶するフイリス。

「か、かわいいわ・・・何かあつたらお婆ちゃんに言つさだよー」

一瞬で骨抜きにされるマコアン。

「母さんが婆ちゃんってことはジョシュは叔父さんか。しかしそも
そも俺の子供だと、どうしてこうなった・・・」

疑問がぶり返してきたクリス。

ちなみにジョシュは既に酔いつぶれて、兄が部屋に運んだ後である。
酔いつぶれた村人は基本放置なのが、なんだかんだと弟に弱い兄
である。

「主、何を言つてますか。この子は主と私の子供です、しつ
かり認めてください、往生際が悪いですよ」

「あんた！こんな可愛い子を前にしてよくそんな事が言えるね！表
出な！再教育だ！」

マリアンとフウリが結託し、クリスを責めたてる。

「おとうさん　ふいりす　いじも　いや　？」

フィリスがただ見上げてくる。

「そんなことあるわけないじゃないか！…お父さんはフィリスの味
方だからね！世界を敵に回してもいいよ！？」

即座に方向転換するクリス。

「さすが主です。家族で新しい世界を作りましょう！」

「なんで一度更地にやる」と前題一?

「私は綺麗好きなので。しかし、いつなると主のベッドは少し手狭ですね、どうしようか」

「綺麗好きが高じて世界を更地にするのはやめてください……。ベッドはフウリが浮いて寝ねばよくな

「何馬鹿なことこってるんだい、あんたは。ベッドならウルバのが私の部屋にあるから、持つてこつてくつ付けな

マリアンが口を挟む。

「さすが、お義母さまです。早速運ばせせていただきまや、主が

「あはー・・・

酔つてこらのか、よろよろとマコマンの部屋に向かつクリスだった。

翌日、叔父やると喧嘩するジヨシュの姿があつたとか・・・

フイリスはマリアンとベッドへと向かう。一緒に寝ることやうある。

そのときは、ベッドが一つあるクリスの部屋では、なぜかベッドの一つが空でいるみつだ。

ジヨシュは仕事に精を出し、クリスも手伝おうと思つたのだが、弟の畠を手伝う兄の図を想像し躊躇する。

結局、得意の鍊金で村の農具や生活用品などを修理して回る」ということを認するクリス。

村人たちは、ここにきてやつとクリスが魔法使いだとこいつことを認識する。

「クリ坊、本当に魔法使えたんだなあ」

「俺はてっきり嘘かと思つてたぜ」

「つていうかフウリ様とはどうこう関係だ！？」

「むしろ、フイリスちゃんを俺に下せよお義父さん…」

回る所々でいろいろ言われて、そのたびに叫ぶクリスが見られた。

子供たちも面白がつてクリスの後をついてくるようになり、ついでにと村長に頼まれたクリスが健全な遊びを教えたりしている。

「いいが、的から田を逸らすなよ。しつかり狙いをつけるんだ。一番的に当てた数が多い子には豪華景品があるぞ！」

子供用の「」を作り、皆に扱い方などを教えているクリス。

「子供を物で釣らうとするなんて、ちが主です。しかし、あの吸血鬼の前例もあります、あまり多用しないほうがいいですよ」

横からフウリが現れる。

「あ、フウリ姉ちゃんだ」

「姉ちゃんも一緒にあそぼー」

「おっしゃわらせてー」

「俺が一番」つまこだぜ

「一本も的に刺さってないくせによく言つたなー」

「お前だつて刺さつて無いだろー」

「矢ははずしちゃいけないときに当てればいい、そう、意中の女を射止めるときだけな、って父ちゃんが言つてた

子供たちが騒ぎ出す。

「物で釣るとか人聞きの悪い事言わないでくれる！？少しでもやる気をださせようとしてるだけだし！しかしあのちびっ子吸血鬼はちよつといじめすぎたな、元氣にしてるかねえ。それとおっぱい言つたやつ、後で個別に特訓な。それにお父さんの迷言を暴露した坊主、そつとしておいてやれよ、お父さんもきっと後悔してるからさ・・・」

「

このように、クリスが無職ライフを堪能する一方で、フウリは村の娘たちとよく話をしていた。

フウリはクリスのせいなかなかなりの水準で世間を把握しているので、娘たちが話を聞きたいとせがむのだ。

流行の服の話をしたり、読み物の話をしたりと、精靈らしからぬ引き出しが多いフウリは、面白おかしく話すのによく盛り上がりしている。

「ところでフウリさんは、クリスのどーが気に入ったの?」
「ちやなんだけど、変わってるじやない?」彼

「あら、その変わっているところも魅力的なんですよ。長年生きて
いるとい、変わったものに興味がでてくるんです」

「ええー! フウリさん若く見えるのにー。」

「あらあら、いけませんよ。年齢は秘密です。それに主はああ見えて結構情熱的なんですよ」

「たとえばたとえば?」

「あれは、パーティーのメンバーが遺跡につくまえに脱落してしま
い、主と私だけで遺跡に潜ることになったことがあったのですが、
ちょっとしたミスで主が呪いにかかるにかかつて私との契約が切れそうにな
つたんです。そしたら主ったら、私との契約を維持するために呪わ
れた自分の腕を切り落とそうとしたんですよ」

「さやあー! ク里斯君男前ね!」

「腕が無くなつてもフウリさんと一緒にいたかったのねえ

フウリがそんな感じで村娘たちと親交を深める中、リリイは森に入つた罰としていつも以上の畠仕事をしていた。

「クリス君が帰ってきたのに、ほとんど話す時間がない！フウリちゃんの話も聞きたいのにーうがーー！」

少女の叫びが広い畠に響き渡った。

こうして、魔法使いは故郷に平穏を取り戻し、自分もまたその平穏を楽しんだ。

そう、つかの間の平穏を。

番外四「魔法使いと幼馴染」（前書き）

オチに使つてしまつたリリイの株を上げるために。

番外四「魔法使いと幼馴染」

リリイは、子供たちに『』を教えるクリスを見て、昔の『』を思って出します。

小さいころ、リリイとクリスは、そこまで仲がいいこと書つわけではなかつた。

今でこそ、クリスとの仲をしきりに聞いているリリイの両親だつたが、昔はいたずらばかりして、騎士になると夢ばかり言つているクリスを、娘にあまり近づけようとしなかつたからだ。

リリイも、クリスのことをいつまでもいたずらをしている子供と思つており、そこまで関心も持つていなかつた。

そんなリリイがクリスを意識したのは、ある晴れた日のことだつた。リリイは今と変わらずお転婆で、面倒見の良い少女だつた。

その日、妹のユリイが風邪をひき、いつもは一人で行くのを禁止されている森へ、りんごを取りにいったのだ。

りんごを取つて意氣揚々と帰る所としたリリイは、茂みから近寄る魔物によづやく氣づく。

しかし、氣づいたときこは魔物はリリイの田前まで迫つていた。

恐怖に田を囁くつづく。

そこに風切り音と共に奇声があがる。

「ひやつはあ……今晚の肉ゲットだぜえ……」

その奇声の主であるところのクリスは、矢で頭を貫かれた魔物を掴みあげる。

そこで、へたれこんでるリリイを見つける。

「あ、あれ？これ、もしかしてお前の獲物だった！？」

獲物を横取りしたかもと焦るクリス。

しかし、ショックで口からうまく言葉が出ないリリイ。

仕舞いには泣き出してしまひ。

「おおい…泣くな…」じつ上げるから…な？」

頭を矢で貫かれた魔物をずずいと差し出すクリス。

それを見てより一層泣きじゃくるリリイ。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図である。

数分後。

なんとか落ち着いたリリイにクリスが話かける。

「ダメじゃん、一人で森入つたら」

偉そうにクリスが言ひ。

「クリス君だつて入つてるじゃない！」

真つ赤な皿をそのままに返発するリリイ。

「俺はほら、これがあるし」

弓を掲げるクリス。

「けど、大人と一緒にないと入っちゃだめなのはクリス君も一緒でしょ」

すぐにリリイがクリスの自信を打ち碎く。

「よ、よし、お互いつのことは内緒にしよう。すぐ森から出よう

クリスが慌てて言つと、リリイの手を取つて歩き出す。

手を繋ぎながら、リリイはいろいろな話をクリスとする。

クリスの話は、いたずらの自慢話が中心だったが、面白おかしく話すクリスにリリイは妙に惹かれてしまった。

結局、帰つてから二人は、それぞれ手に持つていた物で、どこに行つていたか判明し、こっぴどく叱られることとなる。

それから、クリスとリリイは時々会っては会話をするようにな。

しかし、それも長くは続かず、クリスはある日、村を出て行った。何も相談せずに出て行ったクリスに最初腹が立つたリリイだが、段々心配になつてくる。

その心配も過ぎると、あのクリスだしその「うちひょつこり帰つてくるだろ」という、妙な信頼がリリイの中で生まれた。

それからリリイは、クリスの手下だった子供たちの面倒を良く見るようになる。

「リリイ姉ちゃん、よくひづけへんけど友達いないの？」

「しかたないなあ、リリイ姉ちゃんは。ほらつんじあげるよ」

「おこ、リリイ姉ちゃん、俺たちはトリエ村騎士団なんだぜ。カッコいいだろ」

「将来お嫁さんにしてあげてもいいよ？」

「スカートめくつていい？」

「姉ちゃん、そつちはあぶないって。初代団長が罷放置していったから」

「おい、壇つてゐる傍から姉ちやんが罠にかかった！」

「なんとこ'づ一本釣り」

「スカートをめぐる前に姉ちやんが直ら逆さづりだと・・・」

「サービス精神旺盛すゞぎる」

「おこ馬鹿いってなこで、リリイ姉ちやん下ろせないと」

「あぶなつ！姉ちやん暴れるなつて！」

どつちが面倒を見てるかわからなによつた関係が結構続いた。

それでも、年下の面倒を健気に見るリリイに、段々村の男連中は魅了されていく。

そして、面倒を見られた子供たちも惚れしていく。

ここ最近の、トリエ村お嫁にしたい女性ランキングと初恋の人ランキングで堂々一位を飾っている。

ちなみに村長の息子調べである。

そんなリリイは、男連中の熱い視線に気づくことなく、今日も畑仕事に精を出して、帰りに見かけた森に行く子供たちを注意しようと

追つて行く・・・

番外五「魔法使いと魔兵の出来事」（前書き）

私の組織票がおっちゃん枠に注ぎ込まれた結果ー。
少し違つた感じで書いてみました。

番外五「魔法使いと魔女の出来」

その日、少し遅くなつたが依頼を終えた俺は、ギルドへ報告し、寮へと帰ることにだつた。

最近の俺は、鍊金にはまりだしてかなり金欠気味で、今日の飯代にも困る様になつていた。

師匠に言えすればすぐにでもお小遣いをくれるだろ？が、あの幼女師匠にそこまでしてもう一つの、見た目的にも気が引ける。

そもそも、幼女師匠には日々の寮での生活だけなら困らないような額を、援助してもらつていい。

これは絶対返そつと思つてゐるのだが、あの師匠がお金をただ返すだけじゃ受け取らなこととは思ってゐる。

なのであの遺跡マニアの嗜好をくすぐる物品で返してこいつと黙つてこる。

お金が無い、師匠に恩を返す、この二つを解決するのにギルドでの仕事はとても有効だと想つ。

研究者の依頼で、遺跡に潜つて魔物を倒しつゝ何か珍しいものでもあれば、交渉次第では貰えだし、勿論給金もある。

なので、最近は休日になるとほとんどギルドの依頼でつぶしていく。

今回は丁度、国からの遺跡探索の依頼があつたのでそれを受けていた。

国からの遺跡探索の依頼は、安全確保、確認が目的なので、遺跡に何か残つていれば持つて帰つてもいいという暗黙の了解になつており、俺にしてみればとても有難い依頼である。

休田冒険者の俺がそんな面い仕事にありつけるのはまれなので、張り切りすぎて予定にない階層まで探索してしまつた。

田も落ちてきて、寮の夕飯に間に間に合ひか微妙だったので、シヨートカットするつもりでいつも治安がよきやうじやないのであまり使わない薄暗い路地裏を足早に歩く。

そこへ、やつぱりといふか、脇道から出てきたチンピラが三人ほど道を塞いで一ヤーヤ笑つてゐるのが見える。

面倒事を起こして学院に知られるのはまずいと思い、もと来た道を戻ろうとする。

しかし、すでに後ろにも一人のチンピラが道を塞いでいるのを見て、どつゅつてやつゝ過ぐしそうかと考へる。

すると、俺が考へてる間に距離を詰めてきたチンピラの肩を掴むでかい手が田に入る。

「おー、何してんだ？」

低く渋いその声は、そして大きい声でもなかつたのにとても耳に残る。

「な、なんだてめえは！？」

チンピラがうろたえながら答えるのを見て、度胸があるなと思つ。

なぜなら、チンピラの肩を掴んでいたのは竜人だからだ。

俺なら絶対に一目散に逃げ出す、そう思えるほどの迫力を持つた竜人だ。

そして、案の定、肩をつかまれたチンピラから異音が俺の耳に聞こえてくる。

あと少しで肩がつぶれそうだ、そう思いながらも竜人から目が離せない俺がいる。

「俺が質問してるんだ、分かるか？」

もの凄い迫力だ。

竜人がチンピラを離すと、すぐに五人のチンピラが逃げ行くのを見送る。

「おう、坊主、大丈夫か？」

こちらを気遣うように竜人は言葉を向けてくる。

「あ、はい、大丈夫です」

圧倒されて敬語になつてしまつ。

「ならよしーー！」辺はあぶねえからな、氣をつけなー。」

「わ、分かりました、それでは失礼します！」

どうみても、あんなチンピラなんて目じゃないほど危ない匂いのする竜人にそんな氣を使われると困ります。

さつきのチンピラなら、最悪どうにでもできたが、この竜人だけは絶対に勝て無い、いや死ぬ、そんな確信めいたものが胸中を渦巻いて、俺はお礼も言わずに逃げ出してしまう。

その一週間後、連休を使って依頼をこなすためにギルドへと向かう。

今回は、相当実入りのいい仕事をしないと、過去にないほど金欠になると思つ。

なんせ、試験が迫っているので、試験中の休みは勉強しないといけないからだ。

なぜ、あのとき、あの露店であんなものを買つてしまつたんだと、自分の浪費癖をあれこれ後悔しつつギルドへ入る。

馴染みになつてゐるギルドのカウンターのお姉さんに、そじらへんの話を踏まえてお涙頂戴、訴えかける。

すると、お姉さんは一ついい仕事があるとカウンターの奥に引っ込

んで、なにやら依頼書を持ってきてくれたので拝見する。

短期の商隊の護衛依頼だ！

この手の依頼は、大体町から町にいく間に盜賊などの危険がある場合に、長期の護衛以外に護衛を強化するために出されることが多いはず。

もちろん、道中も、帰りも危険が付きまとつたが、その分実入りが良いので、人気があり、僕は一度も受けた事が無い。

今回はどうも、王都と近郊の町の間に少數だが盜賊団が出るらしい。その間の護衛の強化が目的のようだ。

そんな依頼書が目の前にある・・・！

「普通は何日も前に埋まつて、当日に受けれる」とはまずないんだけど。受けてた五人組パーティーが急に断つちゃつたみたいで、商隊の人気が直前まで募集してくれつて言いに来たのよ」

残り一個よ、とウインクするお姉さん。素敵だ。

「ありがとう、お姉さんー今度デートしましょー！」

「あら、嬉しいわ。もちろんクリス君持ちよね？」

僕がどれだけ毎日金欠か知つていてこんな返しをするお姉さん、素敵すぎる。

「すみません、学院卒業後に出なおします

だがデータできるほど甲斐性すらないのが事実なのでこり返しがない、無念。

依頼書に必要事項を書いて、俺はギルドを出て門へと向かう。

護衛の依頼を受けた僕は、門の前で商隊の人と合流する。

「君で最後の一人かな？」

護衛のリーダーが確認をとつてくれる。

「はい、ギルドで商隊の護衛の依頼を受けてきました」

俺は、ギルドの依頼書を渡すと、リーダーは少し考えるようにこちらを見てくる。

「ふむ、たしかに。すまんな、少し幼いようにみえたが、実力はあるようだ。君の剣の腕に期待しているよ」

おかしい、なぜ剣の腕なのだ。

確かに、剣を引っさげてはいるが、依頼書の必要事項の職業の欄にはちゃんと魔法学院在学と書いたはずなのに。

納得いかないものを感じながら、俺は護衛に割り振られた商隊の荷車に向かう。

列を成した商隊の前方付近にある所定の位置に向かつて、なにやら大きい影がみえる。

「どうみても、一週間前の竜人さんです、本当にありがとうございます。

無意識にお金と命を天秤にかける。

何故か、あの竜人を前にすると問答無用で死ぬと思つてしまひ。

「おう！なんだなんだ、坊主もこの依頼を受けたのか！さつきまで坊主に絡んだチンピラどももいたんだがなあ、何故かどつかいっちまって、知り合いもいなくて寂しかったぜ。ほりこつちこい、隣座れ！」

竜人が俺を見つけて、うれしそうに馬車の椅子をぱんぱんと叩くのを見て、逃げる気も失せ、隣へとむかう。

絞首刑台に上がる罪人はこんな気分なんだろうな、そつ思いつつ竜人の隣に腰を下ろす。

「よ、よろしく・・・お願ひします」

怖くてどもつてしまふ。

「おう！そんないびくびくすんな。あと敬語もいらんぞ、やり難くてしょうがない、折角短い間だが一緒になんだしな、向こうで用事がないうなら帰りも一緒にどうだ？」

助けてもらつておいてお礼も言わないこんな小僧に、大らかに言う竜人を見て、俺の直感も当てになら無いなと思い、ちょっと心を許してしまつ。

「敬語苦手だから助かるよ、この前は助けてもらつたのにお礼を言わないでごめんなさい。俺クリスつて言うんだ、帰りも良かつたら一緒に頼むよ」

なんていい竜人なんだ、俺はつい口が軽くなる。

「おう、ガキはそのくらいふてぶてしいのがいいんだよ、この前のこととは気にすんなよ！俺はベアードつていうんだ。こっちは頼むぜ！」

それから、商隊が出発し、周りを見張りながらベアードといろいろ話をした。

周りの雇われた護衛の人たちは何故かベアードを避けているようだつたが・・・

竜人だからかと勝手に思つていたが、どうも違つらしい。

ベアードの話を纏めると、ベアードは傭兵でドラゴンキラーであるとともに、傭兵团の団長であり、今回はちょうど戦場帰りで休暇だったのだが、酒代が無くなつたために小遣い稼ぎで参加したのだそうだ。

傭兵のドラゴンキラーつてだけでも、冒險者は気が引けるのに、戦場の匂いをふんふんさせている竜人はそれは避けられるな、と心の

中で思い、やつぱり自分のこの魔人への直感は正しかったのではないかとも思つ。

まあ、基本いい人っぽく、身の丈以上の剣を持つていて実力者でもあるようなので、俺の粗い剣術をどうしたら直るかなど、俺のほうからも話題を提供してそれなりに楽しく護衛任務を消化していく。

ちなみに先の質問への返答は「戦場でなんでも切つてしまえば、段々自分にあつた剣になつてくるぞ！俺もそつやつて身につけた剣で身を立てるからなーお前は剣の才能がありそうだしね、どうだ？うちにはないか？ちょっとむさ苦しいがいい奴ばっかだぞ。まあ人族はお前だけだが問題ないだろ？」とのことだ。

この返答はある程度予測がついたのでどうでもいいが、後半がいただけない。ちゃんと魔法学院で学生をしていると言つたのにこの扱い、俺の中でベアードは、おつれん呼ばわつす奴」とに決定する。

そして、なぜだか移動中だけでなく野営中も絡んでくるベアードに、言葉遣いなんてこのおっさんは絶対気にしないだらうと段々ぞんざいな話しか方になつていき、しかしそれを聞いてうれしそうにするベアードにまた少し俺は心を許してしまつ。

おつれんと仲良くなっちゃうことでこの町までもつ少しのところまできた。

しかし、商隊は止まつており、護衛である俺たちは臨戦体制である。

前方にいるのはどうみても盗賊団だ。

こんな開けたところで襲われ無いだろうと、見張りも油断していたのだろうと思う。

堂々と眼前に陣取る盗賊団に、逃げることも出来ずその口上を俺たちは聞いている。

曰く、立ち向かってくるのなら殺す、後ろを向いて逃げるのならば殺す、荷と商人を置いて引き下がるのなら見逃す、すぐに返答しろ、とのことだ。

盗賊団はどう見ても依頼書の内容より人数も多く馬もいる、ここから町までは少し距離があるので増援は見込めない、こんな拓けているところで商人を逃がそうとしてもすぐ捕まる、俺じゃいい案が思い浮かばない。

皆も同じらしく、依頼人に視線を向ける。

依頼人を放り出すことも出来ず、結局依頼人に判断を委ねるしかな
いと思う。

が、隣からなにやら物騒な声が響く。

「なんだあ、あいつら偉そうに。全部ぶつた切つていいんだろう?」

皆が啞然とする、俺も啞然とする。

その妙に響く低い声と共に、一気に駆けだす竜人をただ見送る。

我に返つて、俺は防護の魔法を詠唱する。

俺が魔法使いだといふことをしつかり見せようと、無駄に強固な防護をおっさんと自分にかけ、剣を抜いておっさんの後を追う。

その間に、他の護衛の人たちも、各自、防護の魔法を詠唱したり、剣を抜き駆けていくのが横田につる。

おっさんが弓矢なんて氣にも止めずに突っ込んで、盗賊団の頭らしき人間を中心に周囲一帯を薙ぎ払うのが見える。

ありえない、あれはどうみてもありえないと思いつつ、俺も片手に剣を持ち、もう一方で魔法を放つ。

やつとこを俺はおっさんの横に並ぶ。

「おう！クリス、遅かつたじゃねえか！罰としてあそこのちよこまかと矢を飛ばしてくる馬鹿どもを切って来い！」

「おっさんの突進力がおかしいんだよ！なんで一回剣振るつだけで盗賊何人も吹き飛んでるんだよ！あとそこまでどんだけ距離あると思ってるんだよ！…」

そこまで距離はないが、間の賊の数を考えると突きすすめる気がしない。

「弓があると他のやつらや荷車にかけた防護がきたときがこわいだろ。俺にかけてる防護いらねえから。自分にその分かけられればいるだろ？」

「なんで囲まれてる中で、俺が魔法使いなのをみせてやるって頑張ってかなり強く張った防護いらねえとかいえるんだこのおっさんは

ああああああ

「がつはつは。やあ、ら行つて来い！」

盗賊と切り結びながら俺とおっさんは作戦にもならぬ叫び合ふをすむ。

結局、俺は防護の魔法を自分でかけなおして、弓を射つてくる一団へと飛び込んでいく。

必死に走る最中に思ひ。

あ、やっぱりこのおっさんを感じた直感は間違つて無かつたんだ。

おっさんは絶対これからも俺に、それこそ生死を分つような厄介事を持つてくるだらうと。

番外五「魔法使いと魔兵の出来ごと」（後書き）

投票結果	
姫さま	10票
砂糖を吐く話	4票
フウリの話	3票
金髪友人	2票
会場爆破	2票

おっさん 1000票
でした。

次は姫さまの話を書いて本編に戻ると思います。

番外六「魔法使いと姫」（前書き）

投票で一番多かった姫さまの話です。
マジドなキャラつていいですよね。

しかしおかしいな、このコーヒー、ブラックだったはずなのに・・・

番外六「魔法使いと姫」

そこは綺麗な花が並び、噴水のある庭園だった。

クリスとフウリは、その美しい庭園を眺めながら散歩している。

「うわあ、綺麗だなあ、癒される。来て良かったね」

まるでデータの「定番文句のよくな」とを口にするクリス。

「そうですね。仕事で無ければもっとよかつたのですがね」

フウリが冷たい視線をクリスに向ける。

「あはい、すみません。本当に反省しています」

クリスが必死に頭を下げる。

「口ではなんとも言えますね？今度やつたら主が何故か大事に寮に飾っている木の棒をへし折りますよ？」

フウリは冷たい視線のまま言い放つ。

「まあ、いいです。ここが綺麗なのはたしかですからね、主のお財布の中身くらい綺麗です」

フウリは相変わらず、冷たい視線をクリスに向いている。

「す、すこしは残してるんだ……ぜ……？」

「何かいいましたか？…どうも無い主をね」

「すんませんでした！」

なぜこんな険悪なことになつてゐるかと云つと、数日前に遡る。

学院が連休に入ったので、王都から遠い、トライン聖王国との国境沿いの町まで護衛の依頼を受けたクリス。

依頼自体は難なくこなしたのだが、そのあと立ち寄った町で、師匠が欲しがりそうな本を見つけてしまう。

つい最近、クリスは遺跡一個潰してしまい、師匠を涙田にしてしまつている。

そんなことを考へていると、気づいたときには、持ち金のほとんどを使い本を購入していく、乗り合に馬車にすら乗れなくなつてしまつていたのだ。

そこで別行動をしていたフウリが合流。

事の次第を聞いて呆れるフウリに、謝るクリス。

飛んで帰つてもいいのだが、フウリと契約したばかりで少々不安のあるクリスは、どうにかそれ以外の方法がないか考える。

「（歩くには少し距離があるし、道中の宿代や食費もない。飛べば

結構近いのだが、契約したばかりの風精霊なので少し怖い。どうしてなんか。もう一仕事するかなあ）」

クリスが考えていたところに声が掛かる。

クリスの学院の友達、アレン・コンクルールである。

アレンはオーカス王国の貴族で、クリスとは学院の同級であり頭がよく、そして変人だった。

ただひたすらに、その頭に入っている知識をもとに怪しい実験を繰り返す、実験に足りないものがあれば躊躇なく親の権力だろうがなんだろうが使う人間だ。

そのアレンがクリスに、トライン聖王国に姫さまの誕生会に行くから、それについてちょっととした頼み事を聞いてくれれば謝礼を出すと持ちかける。

アレンは、クリスがこの町まで仕事を行くことを、本人から聞いて知っていたので、ダメもとでさがしていたのだ。

そして、クリスはアレンの考えた中でも一番いい状態で見つかった。すなわち、クリスがお金に困つて、どんな仕事でも受けてくれる状態だ。

アレンの願望通り、クリスはその仕事に飛びついた。

そして、数日かけてこのトライン聖王国聖都の王城につき、アレンがパーティーに参加しているので、クリスは庭園を散歩してゐるのだった。

フウリは、この王城に入った途端に雰囲気が暗くなつた。

「どうしたんだ、フウリ？」

「すみません、主。ここは天使の気配が強いので、どうこも調子がないんです」

「えなにその悪魔みたいな台詞」

「ふふ、主は本当に命知らずですね。調子が出なくてこの城を吹き飛ばすくらい頑張れば出来ますよ。そうですね、そうすれば天使の気配も消えていいかもしません」

「すとおおおおつぱーー落ち着いてくれフウリー」

「私はいつも冷静です。ただやつぱりこの雰囲気は慣れません。少し浮いてきますね」

「それがいいね！けど間違つても攻撃魔法はぶつ放さないでね！」

薄く笑つて急上昇するフウリ。

「ふふ」

「天使の気配で調子がでないって、どんな精靈だよ」

最近契約した精霊の後姿に向かつてぼつりと呟くクリスだった。

その後、フウリは戻つてこず、クリスは一人であてがわれた部屋へ戻る。

そこにはアレンがすでにいた。

「クリス、例のちょっととしたお願ひなんだけど、いいかね？」

アレンが神妙に言つ。

「おお、もううるん！」

クリスが暗い気持ちを払拭しようと明るく言つ。

「それでは、姫さまの背中から羽を一本でいいので採つてきてくれたまえ」

しばし、部屋に静寂が満ちる。

「は？」

そしてクリスが聞き返すが、アレンは同じ言葉を繰り返す。

「え、人間に羽つて生えるつけ？」

「ふむ、こここの王族は天使の血を引いてると言われていてな。特に彼女はその血が濃いらしい。噂はあつたのだが、今日、パーティでちらつとだけ見たが、羽は本当に生えていたな。ただ、ガードが固くて私には採取することができそうになかった」

どこも王族はガードが堅いか、と悔しそうに呟くアレン。

「おいまで、マツド。姫の背中から羽を剥るとか、下手したら戦争になるぞ」

「何を言つんだいクリス！ 技術の進歩に戦争はつきものだよー…さあ、私の研究の更なる進歩のため、あの羽を剥つてきてくれたまえ！」

アレンは腕を広げ天を仰ぐ。

「本物の馬鹿がある・・・」

クリスも天を仰ぐ。

「馬鹿とは失礼だね、君より数倍頭はいいつもりだよ？」

「頭のいい馬鹿ほど性質の悪いものはないな

「まあ、君の風精靈なら気配遮断も完璧だし、すぐ剥れるのではないか？」

話を強引に引き戻すアレン。

「いや、あいつ調子悪くてなあ

「なんと…それは困ったな

あまつ困ったよひ見えないアレンが言ひ。

「明日まで待つとしよう。もしかしたら君の精霊の調子が元に戻つてゐかもしないしね

「いやいや本当に氣かよ!?

「ふはははー! 本当は喉から手が出るほど欲しい触媒だが、まあ無ければ無いでどうとかなる。しかしあると私は嬉しい、もちろん君も嬉しいなれる

分かったかね? と黙りそのまま部屋を出て行くマジド。

「俺ごどひじひと叫びただ、あのマジドは…・・・あれで優秀でさえなければ…・・・」

マジドだが優秀すぎるためこそ、アレンを止めるのは極端に少ない。

そのアレンはそこにつきてきた自分を呪うクリスだった。

夜。

雲が薄く広がり月明かりを隠している。

フウリがまだ帰つてこないので、心配になつたクリスは庭園へと足を伸ばす。

と、そこには一人の少女が立っていた。

クリスは今日のパーティーに来た貴族かと思い、その場を立ち去ろうとする。

しかし、逃げる前に何故か少女に腕をつかまれてしまつクリス。

「待つてください」

少女が必死そうに言つので向きなおつてしまつクリス。

「あー、すみません、俺はパーティーに呼ばれた貴族の従者なので・
・」

とりあえず、クリスは貴族で無いことをアピールしてみる。

「呼び止めて」「めんなさい。よければ少しお話しませんか?」

潤んだ瞳で見上げられ狼狽しつづくなずくクリス。

「よかつた。それでは、あなたのお国のお話を聞かせてくれませんか?」

期待に満ちた目をし、手を組んでお願いする少女。

クリスは仕方なしに、ギルドの話ををしてみると、これがどうも好評のようだった。

「まあー空に島が浮いているのですかー私も飛んで見たいです」

クリスが空の島の話をすると、少女は思いの他食いついてきた。

と、そこで雲が流れ、月が顔を出す。

月の光を浴び、まるで天使のような美しい姿と羽を持つた少女がクリスの隣に座っていた。

「（つて姫さまじゃないかあああーありえないよーなんでお付きも連れずにこんなとこいるのぉおーだれかたすけてええー）」

ムードもぐったくれもなく、クリスは叫びだしそうになる口を押さえ、心中でシャウトする。

「どうしたのですか？」

姫さまは、クリスが口を押さえているのを見て、顔に手を伸ばす。

それを止めようとクリスが手を出し、あまりせん手と手がぶつかった瞬間、風が吹き一人の体が飛び上がる。

「やあー！」

クリスには覚えのある感覚だが、少女は混乱したようでこちらに抱きつこうとする。

「大丈夫ですよ姫さま。これはさつきお話した俺の風の精霊の仕業ですから。姫さまが飛んで見たいと言ったのを聞いてたようですね」

それまで実は、敬語を使つていなかつたのだが、さすがに姫さま相手だと分かつた以上、慣れない敬語を使つクリス。

「あらー…そつなのですか。とても良い精靈さまと契約してますのね。あと敬語はいりませんわ」

姫さまは空に浮いてることがとても嬉しいのか、クリスから手を離さないままぱたぱたと体を動かす。

「しかし夜空の旅をするにはちょっと薄着だね」

クリスはそういう言ひ方で自然な動作で上着をかけて、ついでに羽を巻ろうとするも、少しバランスを崩し失敗する。

「ありがとうござります。といともやせしい方なのね。」そのまま連れ去つて欲しいわ・・・お願ひ・・・

ううとうとした声で言ひ姫さま。

「（これは高貴な少女特有の田馬の王子さま願望病か！下手な答えはまずいぞー）」

貴族のお姫さまが、たまに本当に平民と駆け落ちして、大騒ぎになることがある。

何度も搜索に加わった事のあるクリスは、彼女らの、男ではなくその状況を愛している様子を見ているので対処に困る。

下手な事を言つと、好いている設定のはずの男にまで向かっていく

のだ。

「（いやしかしまだ軽度だ、返答を間違えなければ生き残れるー。）

クリスは引きつりそうな顔を堪えて笑みを作る。

クリスは、慎重似に姫さまに言葉を返す。

「しかし姫さま。姫さまも俺も帰る場所がある、やつだらつ。」

心の中でこいつを殺してくれと絶叫するクリス。

「やつ・・・ですね・・・、けどこいつかきつと迎えに来てください。」

目に涙を貯めて言う姫さま。

「そのとき、まだ君が飛びたいと思つていたら、空を見上げて、「ひん、俺が迎えに行くから」

心でひたすら涙するクリス。

それ以上は何も話さず、ただ姫さまの部屋のテラスまで風が運んでくれる。

そしてとうとう別れの時が・・・

「もう行つてしまつたのね、せめてお名前だけでも

ここまで死守してきたものを、クリスはなんとか守りたがつとする。

「名前なんてものは飾りさ。君と俺がただいる、そつだらう?」

クリスはいろいろと捨ててまでも、それを守り通そうとする。

精神が崩壊する音がクリスから聞こえてくる。

これ以上は無理だと、テラスから自分の魔力で離れようとする。

「待つて…」れを私だと思つて持つて行つて…」

そういうと、姫さまは羽を一本自ら手折つてクリスに渡す。

「私は忘れないわ! あなたのこと! あなたもそれを持つて私のことを忘れないで…!」

クリスはまだ笑みを称えてテラスからぐんぐん離れていく。

すると不幸な事に、姫さまの大声を聞いた衛兵と王が部屋へと入つてくる。

「貴様! …どこの者だ! !」

王が大声をあげ魔法放つも、すでにかなり離れていたクリスは、なんとか逃げ切る。

結局、クリスはそのまま飛んで王都までもどる」とになる。

「主、なかなかいい見世物をありがとうございます。おかげで大分調子が戻りました」

「阿呆かあああ！何で姫さまを飛ばしたし……」

「面白そつだつたからに決まつてゐるぢやないですか。あと、あの傲慢な天使どもの末裔が、空も飛べないと嘆いてゐるのがどうにも気になります。つい」

フウリが悪びれずに言つ。

「フウリの思いつきで俺が犯罪者一直線だつたよ？…けど調子が戻つたのはよかつたね！…」

やけくそ氣味に叫ぶクリス。

「主のおかげです、ありがとうござります。今ならキスしてあげますよ？」

そう言つてフウリは後ろからクリスに抱きつく。

「何か釈然としないものがあるんですね！キスはいらん！」

クリスはなんとかフウリから逃れようとする。

「照れ屋さんですね、可愛い主」

フウリはまつたくクリスの言葉を聞かずには近づけぬ。

「やめろー飛んでる最中に引っ付くなー落ちる落ちるー」

耳元で聞こえるフウリの声に怯えるクリス。

「ふふふ、落ちたくなかったら暴れてはいけませんよ、主。私の加減が間違つてしまつかもしれません」

「いわいわーああー顔を近づかぬなーむぐう」

動きの止まつたクリスの口をフウリの口が塞ぐ。

「ふふ、可愛い主。まだ契約したばかりですが、私はそれなりに主を信用しているのですよ~キスしたいへりこには」

だから主も信用してくださご、とフウリは続ける。

フウリはクリスから離れる。

「すまん、最初から飛んで帰つてればよかつたな

クリスはフウリのほうを見て眩くようござつ。

「少し悲しかつたんですよ?主は、私にとつて、あの空の牢獄から助け出してくれた、白馬の王子さまなんですか?」

そつとクリスの手を握り、こつこなくしおりこに薬草を口にするフウリ。

「う、本当にすみませんでした」

その様子にたじたじのクリス。

「言葉ではなく、行動で示してほしいです、主

そつ言うと、クリスの前に回り込むフウリ。

そのままクリスのほうを向き、田を瞑る。

魔法使いは意を決したように、風精霊の肩に手を置くと、一人の距離が縮まっていく・・・

なんやかんやあって、帰りの空の旅の途中。

「ふうむ・・・。フウリ、昔話でもしながら帰るかあ、考えたらついこの間契約したばかりで全然お前のこと知らないもんなあ」

少し考えたクリスが提案する。

「なんですか主、私の事ならなんでも知りたいのですか、仕方ないですね。まずはそうですね、私の嫌いな嫌いなシルフの話からしましょうか」

そつ言いながらフウリが嬉しそつにクリスに後ろから抱きつぐ。

「最初からえらい飛ばすね！ビッグネームだよそれー？」フウリの名

前にしようとしたら怒られるし…」

フウリとクリスは、星が輝き、月が照らす夜空を進む。

「そうですね、それも含めて話をしましょう。天使に創られた私たちが…」

・・・・・

二人の関係は少しずつ変化するのだった。

その数日後、帰ってきたアレンに、黙つて先に戻った事を詫びを入れに行くと、アレンは何故か上機嫌だった。

「聞いたぞーあの王相手に大立ち回りをしたそうじやないかーえらい騒ぎになつてたぞー犯人は分かつてないようだつたが、私はすぐにおひんときたよーさすがは我が友人だ、私より狂氣を孕んでいるぞー！」

その言葉を聞いて隅で丸くなるクリスだった。

そして更にその数年後、比喩表現ではない風の噂で、姫さまの病気も完治したことを知り、安堵する魔法使いの姿があつたとか・・・

番外六「魔法使いと姫」（後書き）

投票いただきありがとうございました。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

次回から本編更新しますが、ストックがほほ尽きた上に年末なので
ゆっくりになると思います。

今年は赤い服をきたお爺さんたちを国へ帰す仕事が例年より忙しい
ので、前話を含めて、誤字等ありましたら明日修正します。すみま
せん。

第一章プロローグ

そろそろクリスがトリエ村に来て二ヶ月が経とうとしていた。

「ふう。 フィリスも大分話がうまくなつたよなあ」

クリスはフィリスを膝に乗せて絵本を読み聞かせていた。

「ほんとうへー」

時折絵本の質問をするフィリスは、たどたどしいなりにも上手く話すようになつっていた。

「おう、本当、本当。しかし平和だなあ、村の農具は粗方直し終わつたし」

伸びをするクリス。

それを真似するようにフィリスも両腕を伸ばす。

「久々に平和な日々ですね、主。去年の今頃は王城に侵入してやらかしたりしてましたよね」

昼飯の後片付けを終えたフウリが、エプロンを取りながら部屋に入つてくる。

「思いださせないでくれよ！しかもやうかしたのは俺じゃないしー。あの馬鹿がどうしてもつていうからー」

「フイリスが落ちないように手でガードしつつ器用に頭を抱えるクリス。

「友人の頼みだからと理由も聞かずに、王城と一緒に忍び込むなんて普通しないですよ。付き合いが良すぎるのも考え方です。気をつけてくださいよ」

珍しく心配顔で言つフウリ。

「お、おう。なんかフウリに普通に心配されるのがこんなに不安になるなんて思わなかつた」

予想外のことにはクリスは本音がまだ漏れになる。

「ええ、少し注意しておいてください。何か大きな風が舞い込んできやうです」

クリスの本音を聞いて、更に不安を煽るフウリ。

「おいいい、不吉すぎるーーーも、もう少し詳しく分からぬのーー? 何か食べないほうが多いとかーー鏡をどこかにおいたほうが多いとかーー!」

怯えたクリスはまじないにもすがる勢いだ。

「落ち着いてください主、必ずしも悪いものとは限りません。あと、主は巻き込まれるのは決定しますので、巻き込まれないように対策をしても仕方ありません。前向きに行きましょう。注意しなければいけないことは、巻き込まれたあと、主が死なないかということです」

「なんで巻き込まれて死ぬか死なないかが前提なのー？前向きじやねえー！」

「ふむ。これまでの経験から避けれない運命と云うのが主の場合、少々多いように思えますので、今回も順調に巻き込まれるでしょう。むしろこの二ヶ月平稳だったのが不思議なくらいです。もし万が一悪いものとしても、天使くらいならフイリスの炎と私の風を合わせれば打ち落とせますので、安心してください」

フイリスを撫でながら物騒なことを囁つフウリ。

「ん、がんばる」

フイリスは拳をつくる。

「思ひ返せばそんな氣もするけどー」この二ヶ月はとても貴重だった気がしてきたー！あとフイリス、天使見つけても焼いちやだめですよー！」

クリスが三ヶ月もほとんど何も無く、平穏にすゞすと云ふことは、彼を知っている人物には信じがたいことなのだ。

「私は主の傍なら、平穏でも戦場でも別に気にしませんよーあとフイリス、主を守るために躊躇してはいけませんよー」

しつかりフイリスに言い聞かせるフウリ。

クリスが災いの神に溺愛されていることを理解しているので、自分の力が及ぶ範囲ならなんでもこなれなのだ。

「ん、わかった」

二人の注意を聞いて、普段は天使を見かけても焼いてはダメだが、クリスが危険になつたら天使を焼いてもいいと理解するフイリス。

本物の天使というのはこの世界にはもういないのだが、子孫が残つていると言われ、奇跡的な偶然で背中に羽の生えている人間もいる。

「俺は平穀無事がいいな。まあフウリといるのは嫌いじゃないが。つていうかさらりとそんなこと言わると照れちゃう

フウリの発言を聞いて少し顔の赤いクリス。

「主は照れ屋さんですね。そんなところもからかい甲斐があつて素敵ですよ」

フウリが面白そうに言つ。

「ふいりすは？」

若干むくれたようにフイリスが一人に尋ねる。

「フイリスも私たちの可愛い子です、愛してますよ

「もつちろん！－！フイリスも大好きだよ！当たり前じゃないか！よし、変な事に巻き込まれる前に国外逃亡しちょう！」

親馬鹿一人は、娘を撫で回しながら愛と展望を語る。

「そしてまた厄介事に巻き込まれるんですね。あまり難易度の高いのはやめてくださいね。神クラスが出てくるとさすがの私も本気を出さないといけなくなりますよ」

「おいいいー巻き込まれねえよー!? 難易度選択できるのー? 神クラスじゃないと本気ださないってフウリさん何者なおおお

「冗談です、主」

お茶皿に無表情に言つフウリ。

「どいからどいまでが冗談なのー? ねえー?」

クリスは不安が胸中を席巻し、質問する。

「ああフィリス、主はこれから厄介事に巻き込まれる準備をしないといけませんので、本の続きを私が読んであげますよ」

フウリは、クリスの膝の上からフィリスを抱き上げ、椅子に腰掛けると本を開く。

「ん、わかった、おかあさん」

フィリスは嬉しそうに膝の上からフウリを抱き見て返事をする。

「俺は絶対巻き込まれないからなー! くそ、どうするか。まずは情報収集か、こんな田舎じゃ情報なんて入つてこねえ、一回王都にいくか・・・」

風精靈が火精靈を抱え、本を読み聞かせる横で、魔法使いがぶつぶつと対策を練るのだった。

そして、魔法使いが対策を考える間にもその平穏を破壊する使者がトリエ村へと近づいてくるのだった。

第一話「魔法使いの弟子」

「……がトリエ村か。あの人気がここに引き籠もつて約三ヶ月。周辺にクレーターもないし、何かが暴れた様子もないですね。本当にあの人は平穏無事に過ごしているんでしょうか・・・？」

トリエ村の前で馬に乗って佇む男が一人。オーカス王国の印が目立つ鎧を着込み、剣を腰にさげている。

男はこの国ではさして珍しく無い金髪であるが、顔は整つており、どこか品のある高級感を漂わせている。

男の名前はジョン・タリエール工、オーカス王国の貴族タリエール工家の次男にして、王国騎士を拝命し、王子の親衛隊に所属している。

なんでも王子自らの指名といふことで、貴族間でも一時期話題にあがつたほどの男である。

実際は、王子の友人が弟子の自慢をよくしていたのを覚えていて、引っこ抜いただけなのだが、そんなことを知らない貴族たちの間では、今年とうとう社交界に現れた王家の王子とその騎士は、ただならぬ関係ではないかという噂まである。

オーカス王国では、王族は基本的に成人するまでその存在 자체が秘匿とされ、極一部の人間以外、その容姿すら知らない。

そのやつと顔を見せた王子の一一番信をおいている騎士がジョンなのである。

普通、国の騎士が田舎の村に来ることなど滅多にないのだが、ジョンは自分の主である王子から命令を受けたとしてここへ来た。

この命令に一番適任なのがジョンだからである。

やっと到着した田的地の前で、ジョンは命令を受けたときの事を思い出す。

「おい、ジョン。お前はあいつの弟子なのだから、ちよつと面倒こトラブルに巻き込まれて來い」

僕は今日、急な呼び出しで王城の中にいる、王子の執務室に出向いてこむ。

最近ではじこじど、王子の学院時代の親友たちや一部の重臣たちが集まって日々悪巧みが行われているので、あまり近寄りたくないなかつたのだが。

少しは自重していただきたいのだが、止める立場である王はあまり王子のすることに興味を抱かず、妻である女王が亡くなつてからは、後宮に通いつめていると聞く。

重臣の方々も、そんな王を放つて、自分たちに都合のよい政に日々忙しそうである。中には真に国を憂う重臣の方々もいるのだが、何

を思ったのか、王子の悪巧み会議に参加していくようだ。

そんな執務室で我が主、ステイン王子がどこか楽しそうに言つて僕のほうを見る。

この言葉だけで、我が主が僕の師匠をどう見ているかが分かる。

「師匠はトラブル体质ですからね、危険なトラブルが向こうから花束を持って、それこそ師匠の精靈より速く迫ってきているに違ありません。心配ですよ僕は」

我が主も相当変わっている方で、あまり堅苦しい話方をすると怒られてしまふので、最低限の敬語で話をするようにしている。
まあ、師匠の友人だからちょっと変人でも仕方ない。

そして、我が師匠はというと、王宮魔法院の推薦を蹴つて田舎に引っ込んだのだ。ありえない、師匠を知らない人ならばそう思つだろう。

しかし、僕は師匠が傭兵になつていなかっただけ、まだましだと思つている。

もし、あの人が傭兵になつてグルーモスにでも雇われたら本当に危ない。

そうなつたら、僕が騎士を辞めて田舎に引っ込んで畑を耕していたところだ。

そんな忠義あふれる僕だが、今日はなんで呼ばれたのかよく分からぬ。

無駄話をするために呼ぶよくな王子ではないし、何かばれてしまつたのか。

いやしかし、第一騎士団と揉め事を起したのは、しつかりもみ消し
たはずだ。

第三の連中をぼほぼほにしたあれが今になつてばれたのか？
しかしあれはかなり昔だし師匠がほぼ全部やつたわけだし、僕は関
係ないな。

あとやっぱやうなのは……

「……ジ弔……ジ弔ノ、ジ弔ノ…」

「いえ、第五の馬鹿ビモニ正義の鉄槌と称して下剤を盛つたのは僕
ではないです。勘違いはやめてください」

考え込んでいると王子が僕を必死に呼んでいたので、呼び出しお一
番可能性の高いものを否定してみる。

「ほひ？あいつらに薬を盛つたのはやはりお前か。よくやつたぞ」

どじか楽しそうに皿を細め僕を見て王子は叫び。

さすが我が主、正義の定義が僕と同じだ。

「しかし、その件で呼んだわけでは無いぞ。ただその件についても
聞かなくてはいけなくなつたがな。まったくお前はやるなりませ
んと殺るんだ。中途半端に薬を盛るなんてのはいかんぞ」

再起不能にぐらりと追い込まなくてはな、そう続けて言つてくる王子。

これぞ師匠の友人だ、僕の正義よりも更に固い意思をもつていらっしゃる。

「はい、すみません。次からは王子の『』意向に沿えるような正義の鉄槌を下して見せます」

「うむ、しつかりな。それで今日の用件だが、最近よくここに重臣や私の友人が出入りしているだろ？？」

王子は一つ頷くと、最近のこの部屋の使用状況について私に確認を取つてくる。知つてはいるが、あまり巻き込まれたく無いという僕の意思までは伝わらないのだろうか。

「ええ知つてますよ、夜な夜ないかがわしい密会をしてることですよね」

「うむ、それだ。その密会に我が一番の友人も呼ぼうと思つてな。あいつめ、まさか田舎に引っ込むとは思わなかつた」

「師匠ですか。もうそろそろ三ヶ月になりますね。僕は師匠の故郷のほうから正体不明の大爆発や、天変地異が無いかといつも朝起きると見てします」

王子でもあの師匠の行動は分からぬよう悔しそうにしている。

しかし、弟子でもある僕もいまだに師匠はよく分からぬ。

そもそも、僕のことを弟子と思っているかも怪しい。

僕は師匠師匠と言つていたが、あまり何かを口で教えてもらう機会は無かつた気がする。

実地で教えられることは多々あつたけど。剣の師匠と言つよりが、

戦場の師匠と言つた感じだ。

戦場でドラゴンをぶつた切つておいて、本人は魔法使いのつもりな
のだから笑える。

「私もそろそろ他国で問題を起してやばいことになつていなか心
配だが、そんな話も聞かないでの大丈夫だろ？ お前が行けば、無
下に扱われることもあるまい。最悪、骨だけは私自ら拾つてやる、
行つて呼んで来い」

なんとも、有難いお言葉である。涙が出そうだ。

師匠とそのお嫁さんがいやいやしてるかもしけないところに行
けだなんて、もしその蜜月を邪魔する者だと分かつたらどうからか
吹くそよ風に刻まれてしまつといつことがこの王子には分からぬ
のか！！

確かに師匠も怖い、しかし一番怖いのはその嫁なのだ。

「我が主のお望みとあらば是非もありません。」命令たしかに受け
賜りました」

しかし、王子の騎士としてこれ以外の答えはない。

「うむ、素早くな」

王子は膝をつき礼を取る僕の肩に手を置き、一度叩くとそのまま執
務に戻るのだった。

そんな理由でジョンは今、トリニ村の門をぐるりと見ていく。

馬から降り、門のところに供たちに話をかける。

「すまんが、君たち。リリはトリニ村であつてこらかな?」

村に看板がかかつてゐるわけもないのに、ジョンは子供たちに確認をとる。

「つか、騎士をまだー!」

「おー、かっこーー!」

「本當だ、剣持つてゐる」

「あの剣高そうだな

「兄ちゃんのとは大違いだな

「あれ所々ぼうつけい感じするもんな

「おいたれだ、僕の将来のお義父さんの悪口書いた奴はー!」

「だまれ! フィリスちやんは俺の嫁だああ

「おこ、トロヒ村騎士団の姫に対して嫁とはなんだー。」

「騎士団の挺を破りひとつするとせこ一度胸だー。」

「フイリスちゃんは皆の姫、それ以外は認めないー！」

「制裁だーー！」

ジョンを無視して、年長の子供たちは取つ組み合いで喧嘩に発展している。

年少の子供たちは、ジョンにまとわりつき、剣を取ろうとする子までいる。

あまり怒らないので年下に好かれるジョンも、じいじまで躊躇いなく子供に引っ付かれるのは久しづびりだ。

剣を必死に守りつつも、じいじが自分の師匠が育つた村だらうと確信する。

少し時間を置いて、なんとかお得意のスマイルと口先で子供たちを宥めすかし、ジョンは村長のといいくと案内してもらひ。

こうして魔法使いの平穏を破壊する使者がその一歩を踏み出すのだった。

第一話「魔法使いと親子」

「よし、聖王国に行こう。あそこなら何かあっても、神さまとかが守ってくれそうじゃない！？」

フウリがフィリスに絵本を読み聞かせしてる横でクリスが声を上げる。

クリスは信じていない神にも縋りたいほど追い詰められている。

「急に声を上げないで下さい。神に祈つたらこれまでにないほどのトラブルが舞い込んでくるんじゃないですか？主には災いの神が背後霊のようにはりついてますからね。けどいいですね、聖王国。あそこは天使の末裔がいましたね。ふふ、主も分つてるじゃないですか」

本を置いてフウリは思いだしたように薄く笑う。

「てんし、やく？」

フィリスが、フウリの膝の上で首をかしげて聞く。

先ほどの会話のクリスが言つた大事な部分を忘れてしまつたようだ。

「『めん、やっぱ無し。今の話無しで。俺の背後に四六時中張り付くってどんだけ暇なんだよその神さま…あと、フウリが物騒なこと言つからフイリスまで言動が物騒になつちまつただろ…どうするんだ！』

クリスはちらちらと自分の後方に視線を向けつつ、フィリスの発言がフウリに似てきた事を嘆く。

「はて？ フィリスもそれなりに生きていますからね。 天使の一人や二人・・・」

フウリは首をかしげつつ語尾を濁す。

フィリスは真剣な顔つきで考へているように見える。

「なんでフィリス考へ込んでるの！？ そんなことしてないよね！？ 「冗談だよね！？」 「冗談って言って！」

クリスはフィリスの仕草を見て、昔にそんなことをしたことがあるのかと戦々恐々だ。

「冗談です」「じょうだん」

フウリとフィリスは笑いながら、お互いの手を合わせ悪戯の成功を喜びあう。

二人の声が重なるのを聞いてクリスは、本当に一人が似てきてしまったことに、ただただうなだれる。

と、そこで玄関のドアを叩く音が部屋に響く。

フィリスがそれに一早く反応して、ドアに駆けていく。

最近はフウリやフィリス以外の家のいろいろ持つてくれる客が多い。

その対応をフイリスが自分の仕事と思い、いつも誰よりも先に出手するのだ。

客は大抵家に上がつてお茶を飲みながら話をしていくので、フウリはお茶を二つ入れ、クリスは更にうなだれ、部屋でフイリスがお客様を連れてくるのを待つ。

「おきやくさん、つれてきた」

「すまんの、お邪魔するだ」

すぐに戻ってきたフイリスは、すこし血運げにさわへ一人に告げ、それと同時に村長が上がつてくる。

「村長が来るのは珍しいね。あとフイリスえらいぞ、将来は美人さん間違いなしだな。」

「いらっしゃいませ、村長。あとフイリスは将来、気の利くお嫁さんになる事間違いなしですね」

クリスとフウリは村長を立つて迎え、フイリスの頭を撫でる。

うれしそうに撫でられているフイリスを見ながら、クリスは極当たり前のよひに言ひ放つ。

「馬鹿な、フイリスを嫁に出すわけが無いだろう。俺を倒せるやつになら任せても……いやしかし……！」

「む、そうですね。最低でも主と私を倒せる程度の力を見せていた

だかないと。それで手を握る権利だけはあげるとしまじょ「つか」

まだ見ぬ強敵をどうやって倒そつかと苦悩する親馬鹿と、娘の手を握らせるためだけにまだ見ぬだれかに命を賭けさせることを決定する親馬鹿。

「よしちょっと鍛えてくる」

「私も少し鍛える必要がありますね」

「ふいりすも」

自分が強ければ何の問題もないと結論を出す親馬鹿一人と、理解しないで手を上げて賛同する娘。

「よし、それじゃあ三人で国外逃亡だな。といつことで追つて来るなよ、馬鹿弟子」

そう言つて窓から逃亡を謀るクリス。

村長は慣れたもので、お茶を飲みながら成り行きを見守つている。

そして部屋の前の廊下では、居間から見えない位置に隠れていたジョンが慌てる。

ジョンは村長の家に行き、クリスのことを尋ねたのだ。

そうしたら、彼にとつては信じられないことだ、来て早々に魔力食いなんてレアな魔物を倒して以降は、本当に信じられないことに平穀無事な毎日を送っていることを聞く。

思わずそれは本当にクリスといつ男か、確認をとつてしまつたほどだ。

村長によつてその事実が肯定されると、ジョンは絶望する。

三ヶ月も平穀に過ぐして、いた師匠たちに、その平穀を壊すよつなことを自分が言いに来たと知られれば、よくて師匠に逃げられる、悪くて師匠の精靈に消される、絶望の中でどうにか生き残れ無いか考えを巡らせるひびき、気づいたときには村長に先導され、クリスの家の前にいた。

村長が扉を叩くと軽い足音がして、フィリスが出てきた。

ジョンは、自分の師匠の家族構成は把握してなかつたので、フィリスは師匠の妹なのだろうと判断した。

フィリスに案内され廊下を歩き、すぐに居間の入り口に辿り着き、村長はフィリスと一緒に入つていぐが、ジョンは怖気づいて入るのを躊躇つてしまつた。

クリスとフウリは、ジョンが家に来る大分前から、ジョンが來てい

る」とには気づいた。

正確に言えば、ジョンが村に入ったときにフウリが気づき、家の前の道を歩いてるときにクリスが気づいた。

フウリはジョンが主や村の人に直接害を成すような愚か者ではないことを知っていたので、特にクリスにそのことは告げなかつた。

クリスは、ジョンが家の前に来たとき、確実に件の大きな風だと判断し、どうしたものかと頭を抱えた。

フウリは、二人の客人にお茶を用意しながら、ジョンがどんな厄介事を持ち込みにきたのか、考えを巡らせた。

こうして、魔法使いの平穏を破壊する使者は、その姿を表すのだった。

第三話「魔法使いと精霊と弟子の関係」

居間の入り口の前に、おずおずとジョンが姿を現す。

「お、久しぶりですね。フウリさん、師匠」

挨拶の順番から、ジョンの中でどちらがより怖い存在かよくわかる。

ジョンはフウリのことを、様々な情報に精通して、人の機微にも鋭い変わった精霊だと思っており、師匠のためなら割と無茶をするところ見てきているので、ついつい恐縮してしまいがちなのだ。

そんなジョンの挨拶を聞いて、クリスは窓に向かっていた体を反転させ、今の入り口に向き直る。

「おじ馬鹿弟子ー！お前が厄介事を運んできたことは分かっているんだー！俺の平穏な日々は渡さんぞーー！」

クリスはフイリスを後ろから抱きしめながらそつぬると、ジョンを睨みつける。

まるで威嚇する犬のよつて、目を怒らせ、今にも唸りだしそうだ。

「師匠、落ち着いてください。と、といひでよく分かりましたね、僕が隠れてたの。結構自信あつたんですけど

ジョンはクリスを落ち着かせよつて、厄介事ではない別の話を咄嗟に振る。

ちなみにジョンが気配を消すのが得意なのは、それができないとま
ず死ぬようなところにクリスによつて連れて行かれることが多くあ
つたからだ。

「だれがお前に教えたと思つてんだ！つていうか隠れてたつてこと
は何か後ろめたいことがあるんだろ！それ以上寄つたらこの超絶可
愛い娘の頭を撫でるぞ！撫で回すぞ！」

そういうながら、クリスはフィリスの頭に手を置く。

フィリスは嬉しそうにクリスの手に叩いている。

藪をつついて蛇を出したジョンは、この訳の分からない状況を開
じようとする。

「それ脅しになつてないですよ。ところでその可愛らしい娘さんは誰で
すか？」

ジョンは自分の師匠が抱きついている、おそらく相当可愛がつてい
るであろう妹の話をさせて、少しでもクリスを落ち着かせようとな
る。

「ほほう。師匠に厄介事を運ぶ馬鹿弟子にもフィリスの可愛さは分
かるか！しかしお前なんかに娘はやらんぞ！！俺とフウリを倒せた
ら、四十秒だけ会話できる権利をやつ！」

「ふむ。主の弟子は、いくら可愛いからと言って私たちの娘を嫁に
欲しいのですか？仕方ないです。少し本気をだしましょつか」

とうとう娘と喋る相手すら命を賭けさせることを決定する親馬鹿と、

アップをしだす親馬鹿。

別の方向でふつ飛んだ自分の師匠と師匠の精霊の会話を聞いて、ひたすら頭を悩ますジョン。

「し、師匠とフウリさんの娘ですか？無茶がありませんか？いくら師匠だからって種族は超えられないでしょ？」「

ジョンは、ふとした疑問を何の気なしに口にする。

「フイリスは実の娘だ！なぜなら血はつながっていなくとも、魂は繋がっている！！あと魔力も。いいか馬鹿弟子！大事なのは血じゃない！心だ！！」

「ふむ、主の弟子なのに、少し道理が分からないようですね。この子は主と私の娘です。家族になるのに必要なのは血ではなく心なんですよ」

「うるさいだー」

クリスが田を血走らせて魂の叫びを、フウリが冷静にもの道理を、ほぼ同時にジョンに向かつて口にする。

それに遅れて、クリスに抱きしめられていたフイリスが両手を振り上げ大事なことを強調する。

そしてジョンは、何も考えないで疑問を口にした自分を恨む。

「す、すみません。どうも僕もまだまだ修行がたりないようで」

ジョンはなんとか取り繕つとする。

「まったく、こんなことも分からぬなんて、お前は本当にどうしようもない馬鹿弟子だな！ そんなんじゃ、この災い渦巻く世界を生きていけないぞ！」

「そうですね。もう少し精進するべきでしょ？ 魔法使いである主に、あなたが剣で勝てるくらいに！」

クリスがフィリスを抱っこして、まるで大切なことを言つようにして、生きていくことの大変さを弟子に言い、フウリがぱつたりと自分の主の弟子を切り捨てる。

「その子が師匠とフウリさんの娘だつてことは分かりました。ただ、災いの中心はいつも師匠じゃないですか！！ 何度巻き込まれたと思っているんですか！ それでも生き残ってるんですよ僕は…！ そして、精進しただけで勝てるなら魔法使いを剣の師匠にはしません…！」

理不尽な説教と理不尽な事実を言われ、ほんのり涙目になりながら反論するジョン。

いつもは冷静なジョンも、この一人と話すときは大抵こんな感じに、感情むき出しになってしまひ。

「だれが災いの中心だ！ そもそも、師匠の面倒事は買つてでもするのだが、弟子つてもんだろ！ まったくこれだから近頃の若い者は！」

「あなたの面倒事は生死に直結なんですよ…！」

まるでクリスの無職っぷりを見た村の老人のようなことを、クリス

が弟子に言つ。

それを聞いてジョンは、歩く死亡フラグ量産機の師匠の後ろでその旗を取つて歩く作業なんて、死んでも「めんだ」と思い、形振り構わず叫ぶ。

「そ、そんなことないぞ・・・?」

「なんで田を逸らすんですか」

クリスのもその自覚はあるらじへ、れつきまでの強きが嘘のよう汗を流し、視線を明後日の方向へ向ける。

ジョンはそんなクリスをジト田で見つめる。

「そうだ、おい!馬鹿弟子!俺は二ヶ月平穏にするしていたんだ!それが証拠だ!!」

「よかつたですね、これから三ヶ月分の厄介事が待つてます

まるで鬼の首を取つたかのようにクリスに、冷静になつてきたジョンはいつも通りに返答する。

「やつぱり厄介事を持ってきたのかああ!逃げるぞフウリ、フイリス!」

「あ、しまつた」

クリスが慌ててフィリスを抱え上げ、フウリに手を伸ばす。フィリスはよく分かつていなが、抱えられてくすぐつたそうに笑つてい

る。フウツは手を握られ、しかしクリスを留める。

ジョンは自分の失言に手で口を覆う。

「主、弟子にじつはこの辺にしましょ。何か重要な用事があつて来たのでしょうか? それで無ければ、五寸刻みになる危険を冒してまで、主のところに来たんじゃないでしょ?」

真顔でやつぱりフウツ、ジョンは收拾をつけでもらつたことにまつとすると同時に、何か気にかかることがあれば五寸刻みだったのかと、恐々とする。

「ちつ、命拾いしたな馬鹿弟子ーそれで何の用があるんだ! ? 僕はやらんぞ! 」

「なんで用件聞いといで、結論を一緒に言つんですか! 」

「そりですよ、主。折角弟子が尋ねてきたのですから、少しば宽容に応対してあげればいいじゃないですか。まあ、つまらない話題ならば少しの間喋れ無いよつになるとかもされませんが」

「な、なんですかそれ! どいつも寛容じゃないじゃないですか! 師匠からも何か言ってくださいー! 弟子の口がピンチですよー?」

慌てて師匠に助けを求める弟子。

「お前、口が無くなるとあとは腹黒さしか残らないからなあ。だかんこつから口を取るのはやめてやつてくれフウツ」

クリスは、しみじみと思ひだすよつぱりある。

「たしかにそうですね。主の弟子は、礼儀正しいですがお腹が真っ黒ですからね。フィリス、あまり見ちゃいけませんよ」

「はーい」

フウリがフィリスの皿を両の手で隠し、フィリスは嬉しそうに返事をする。

「何か僕が口と腹の悪さでしか評価されていない気がしますよー!? 師匠としてそれはどうなんですかー!? 剣の腕とかあるでしょーうー! ?」

「それは置いておかないでくださいよーーー！」

「置いておかないでくださいよーーー！」

ジョンは目的も忘れて叫び倒す。

まるでクリスが王都にいるときのような光景が広がっていた。

すなわち、クリスとフウリがジョンをいじり、ジョンが叫び、さらにはクリスが悪乗りしてフウリが諫め、またクリスとフウリがジョンをいじるというエンドレス、だいたいいつもこんな感じの三人組だった。

王子の懐刀、冷静沈着な騎士と噂され、自分の主である王子相手ですら腹黒毒舌を忘れない魔法使いの弟子も、魔法使いとその精霊に

かかれば、その仮面をあっけなく剥がされるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884z/>

魔法使いと風精霊

2011年12月27日20時02分発行